
恋愛 魔法？

ハク白

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋愛 魔法？

【Nコード】

N6906P

【作者名】

ハク白

【あらすじ】

今では『魔法』が、一般常識のように使えるようになった日本での物語――。

ある日いつもと、変わらない日、いつもと変わらない生活・・・と、思っていたけど・・・「この日をもって、『全魔法教育学校』に編入とすっ」勝手に編入させられるわ、しかもよりによって、魔法が一切使えない俺が魔法学校に！？如月一茶15歳、俺は早くも人生の苦難を迎えています。 父さん、母さん、俺早死にタイプだな・

・。
二章始めました。

プロローグ

魔法――。

誰しもが一度は夢見たおとぎ話。

けれど、それは昔の話。

現代、そう此処の世界では今や魔法が一般常識の一つに入るくらい
の普及および、使用率だった。

原理は分かっているわけではない。ただ一つ言えることは――。

『簡単に人を殺せる』

ということ。

訓練をすれば、炎も操れる。魔法を人に対して向けてはいけ
ないという法律はもうずっと前に出来た。それこそ、いつの時代か分
からないくらいに。

魔法を人々が使い始めて、数年。今としては、かなり昔の話。と
ある男の子の話。

彼の名前は『天壤皇^{てんじやうきやう}』

この世界で、唯一魔法が使えない、男の子。

夢――。

それは、儚く^{はかな}、そして簡単な希望。

『僕も・・・魔法使いに、みんなみたいになりたい・・・』
魔法を使える人からのいじめ、否^{いな}、虐待。

そんな日々にも耐えられた理由は、目の前の女の子。名前は『楔^{みそぎ}
かなえ^{かなえ}』

『私が、ついていてあげるから・・・ね??赤髪くん』

赤髪、それは皇一のあだ名であり、髪の色だ。

『うん――。ありがとう』

崩れ去った、日常。

たぶん『恋』だったんだろう。

目の前には、息をしない、冷たくなつた鼎が横たわっていた。
『どうして・・・ただ魔法が、使えないだけなのに――』

少年は心に決めていた。見返してやる――と。
そして、それから数年。世界をも揺るがす存在『天壤皇一』が誕生。

魔法は才能。

頭脳は努力。

あらゆる魔法を分析、解析する禁書目録インデックスを武器に、世界に抗い、
そして死んだ。

彼は、のちのち教科書にも載るほど、有名な人物になっていた――。

変転の厄日

突然だが、皆さんはテレビで見る事件：例えば、連続殺人とか、不意な事故とか、どう思うだろう？俺なら当然こう思うね――

『お気の毒に』

と。

まさかとは思っけれど、怖いなんて思うはずがない。ましては、助けたいなんて論外だ。

だいたい、そんな事件にあった奴はある意味『強運』だろう。身近に起きるなんて絶対にない。

・・・数分前なら、こう言えただろう。

だが、今は言えない。なぜなら・・・

俺、如月一茶15歳はただ今、誘拐され中なのだから――

現在進行形で誘拐されている俺なんだが、まずなぜこうなったのかを整理してみよう。

えええつと・・・確か今日は俺の通っている『冥王天王中学』をめでたく卒業の日だった気がする。

名前もそうだが、この中学は今や将来有望の人間のみが集まる私立の中学で、幼稚園からエレベーター式の大学まである。

将来有望の人間のみ通うなんて、大それたことを学校側は言っているが、この学校は学問と運動の2種類の有能の人材を集めている訳で今や一般常識の魔法は一切教えられていない。

まあ、日本の新しい法律で『魔法は高校から』という法律があるので、まだ中学卒（予定）の俺には分らないんだが・・・。っあ、一つの学校を除いてだけ。

話が脱線しかけてるからもとに戻そう。

んで、俺は今日も家から出て、歩きで数分の学校に行こうとして…

「やつほ、先輩。今日もいつも道理のしけた顔ですね」

家を出てすぐに声をかけられる。

「うつせ、つてか先輩に向かって、しかも朝一の掛け声がそれつてお前、気すぐくおとすわ」

「いやだなあ、毎回おなじみじゃないですかっ」

はあ、そうなのだ、なぜか俺が家を出るとこいつが来る。タイミング変えたりしてみるが、「少し遅れた」なんて言いながらバツタリ会うのだ。

「つたく、まあ今日でお前とは校舎違くなるからな、大目に見とくが」

「おつ、先輩、なんか優しいですね。普段からそんなだと、モテると思うのにな」

「大きなお世話だ」

つとまあこんな風に毎回登校するんだが・・・つと、こいつの事まだ何もはなしてなかったつけ、

名前は「榊原 夏帆」髪は若干ピンクがかっていて、後ろで縛っている、いわゆるポニーテールつてやつだ。顔は童顔、その顔と同じで体も小さい。

「先輩・・・今何か変なこと考えませんでしたか？」

「やだなあ、変なことつて、ただ小さいなつて考えたただだよっ」

「なにが、ですか？」

「ん？お前が（ニツコリ）」

「・・・先輩、ニコニコしながら言うつと、ロリコンなんじゃないかっ？つて疑われますよ？」

ああ・・・自分がロリに分類されることは突っ込まないんだな。

「・・・・・・・・」

「ん？どうした？やけに今日は静かだな」

いつもならかなり、そしてうざいつてくらいに話しかけてくるのに。

「・・・・先輩とも会うのがコレが最後って思うと、少しさみしくって」

「何いつてんだよ、俺と会うのは最後ってわけじゃないだろ？高等部も同じ敷地なんだから」

「いえ・・・・実は今日で転校するんです」

「ほほう・・・・なるほどな、だけど此処から転校なんて珍しいな」

「はい・・・・なんか、親の都合で」

「ふうくん・・・・」

「『ふうくん』って、何も思わないんですかっ!？」

「え？ああ・・・・何も今日が今生の別れってわけじゃないんだろ？携帯の番号も教えてあるし、その気になれば会えるだろ？」

「そ、そうですね・・・・なんかさみしくって」

「まあ多少朝が楽になるから俺はいいけどな」

「ひどいつ。先輩ってばひどいつ。朝のゆったりと、私、どっちとるんですか!？」

「朝」

「即答!？せめて考えるくらいはしてくださいっ」

「考えた結果『朝』だ」

「んなつ。くう・・・・」

けど・・・・確かにさみしいな・・・・少しだが。

「もう、いいですっ。クラスの友達に挨拶してきますっ」

そう言っつて、夏帆は走って行った。

・・・え？あれ？なにもおかしくなくね？じゃあなんで俺誘拐されてんのさ。

はっ。まさかこれは夢！？・・・なわけないか。実際感覚あるしな。

「・・・・・・・・」

っあ、そういえば、たしか夏帆の見送り(?)をしてあと、突然ガンッって頭の後ろつまり後頭部に音がして・・・それだっ。ってかそれしかない・・・。

「けど・・・なぜ俺なんかを、とくに家柄なんてないし・・・」
はっ。まさか俺は金持ちの隠し子っ！？

「なんてバカなことを想像するのもやめよう」

いまは様子見だな・・・だいたいしゃべれないようにしてないし、何より手を結んでない。

誘拐犯だったと仮に想定したら・・・こいつは馬鹿だろう。

いまは様子を見て、後で逃げるか・・・。

「・・・・・・・・」

暇だ。車に乗ってるのは分かるが、暇だ。

「~~~~っ」

鼻歌が聞こえるな・・・。

「・・・・・・・・」

「~~~~」

「下手ですね」

「・・・いいじゃない」

返答してきた！？しかも声からして女っ！？

「ってか起きたんだ。もう少し待ってて、あと少しで『着く』から」

「・・・『着く』？人売買か？」

「・・・俺を、どうするんですか？」

「着いてからのお楽しみっ」

「……………」

「あと、私が鼻歌歌ってたのも、下手なもの忘れて。忘れないと・
・お仕置きだぞっ」

かわいく『お仕置き』って言われた！？すこしドキってしたじゃんかつ。

「まっ、その間まで眠っというて」

眠っというってどうやって――

ガンッ

また、後頭部で音がして……ってこれ鈍器だろうな。
こうしてまた俺は眠りについた

「…………ん、うう」

ここは……どこだ？

「おっ。起きた起きたっ」

この声は確か――

「鼻歌が下手な――」

「死ぬっ？（ニツコリ）」

「すみません……」

なんかすつごく、殺気が……

「まあまあ、落ち着きなさい」

ん？知らない声だ。

「はい、すみません」

さっきの女が謝ってるけど……

「やあ、はじめまして、如月くん」

――！？俺の名前を知ってる！？

「あんた誰だ？」

顔をあげそう言いながら言つと……

「私は、この『全魔法教育学校』の理事長、源 至言」
『しげん』と名乗った年老いた男は続けてこう言い放った
「又シ、如月一茶は、今日この日をもって此処『全魔法教育学校』
に編入とすっ！！」

そう、この日から俺の人生は180度変わったのだった。

隠れた気質

「又シ、如月一茶は、今日この日をもって此処『全魔法教育学校』に編入とすつ！！」

「……は？」

「いま、なんて言いました……？」

「此処、全魔法教育学校に編入しろっていったんだよ」
隣にいる鼻歌の下手な女がいった。

「……どういう意味、ですか……？」

「そのまんまだよ。お前にはこの学院に入ってもらふ。あつ、ちなみにお前に拒否権はないからな？」

「……んなつ。無茶苦茶なつ。きつとこれは誰かのいたずらにきまつてる！」

「……な、なにいつてるんですかつ。も、もういたずらが過ぎてますよ。ほ、ほほほら、そこに隠れてるんだろ？分かった、夏帆だろ？今日が最後だから、分かった分かったから、俺だつてさみしかったんだぜ？」

「……ふう」「……ふう」

鼻歌の女と年老いた爺さんがため息をついたのは、聞こえたが俺は聞こえないふりをした。

「……なんで、そ、そろそろ出てきてもいいんじゃないかな……？」

「悪いけど、これ事実な？」

「……。わけがわからん……。」

「……待てよ。コレが真実なのは100歩ゆずって認める。けどな、俺には——」

「拒否権がある、なんて言わせないよ。なんせ此処はあの『魔学』なんだからね」

『魔学』それは『全魔法教育学校』の短縮形だ。

「キミも、知っているだろ？なんせ“あの”冥王天王学園の中等部三年の全校生徒500人の内“第2位”の天才君なんだから」

「——つ。どこでそれを」

「キミのことは調べは付いてるんだよねえ。んでどうする？この学院のこと知ってるなら選択肢は1つしかないと思うんだけどなお姉さんは」

「・・・知らない訳じゃない。俺が車に居る時「魔法は高校生からって法律できめてあるから・・・っあ、1つだけ例外が・・・」なんて感じのこと言っただと思うが・・・。その例外が此処『魔学』なのだ。」

此処は、基本的な方針は冥王天王学園と同じ、天才の育成または、天才の卵の開花だが、冥王天王学園は学業、運動の才に対して此処魔学は、『魔法』を育成または、開花させるのだ。

魔学は法律に縛られていない。いや、正確には国の力では“縛れない”のだ。理由は簡単だ、その気になれば国なんて魔法の力でつぶせるからだ。

今から約3千年も昔、まだ極一部の人間のみしか使えなかった魔法、原理は今になっても分からないがその力は強大過ぎだった。念じれば火を出し人を苦しめたりすることなんて容易だ。そんな人間を当時の人間たちは、非常に嫌悪し、そして隔離をした。ある第の魔法を使える人間がある時、同士たちにこう言い放った、

「なぜ我らがこのような仕打ちを受けなければならない！我らはただ普通に暮らしたいだけなのに！見返してやろう！人間どもを！！」

と。

当然それにほとんどの者が賛成しそれから約2カ月後戦いは始まった。これは後に『第1次魔総大戦』と名づけられるが、結果は聞くまでもないだろう。当然、魔法側が勝った。決して国の戦力が弱

いわけではない、いや戦力的には国はその時期かなり強かったらしい。外交を盛んにおこなったり、魔法を使える人間を売買し、得た金で戦備品を買ったのだ。ちなみに、売られた人間、買われた人間の末路は『死』1文字だ。なぜ、どうして魔法ができるのか？こういう学者たちだ必ず買いそして人体実験や、解剖を行うのだ。

こうして得た戦力は強大になった。当時の日本は、第二次世界大戦の敗走により無くした美称“大日本帝国”を取り戻しつつあった。その最中、戦争は勃発、なんと1ヶ月も掛からないうちに制圧を完成させたのだ。日本全土がその反乱軍だった1万人に降伏、日本を乗っ取ったのだ。

それから約100年、上下関係はハッキリとしたままだったが、国連が日本を元に戻すという決断をし、世界対日本という形で“第3次世界大戦”が勃発。後に日本が降伏、魔法を使える人間と、ただの人間は平等という形で政治が再開した。

という歴史だ。そうこの学院は、かなり危険なのだ。たしかに、日本には国民の約9/10の人間が魔法を使える。なんたってその戦争から3千年たっているや、かなり友好な関係なのだから。

けどな・・・けどな・・・俺は――

「魔法が使えないんだぞおおおっ！！！！」

そう、俺は魔法を養うこの学院にとつて無くてはならないもの、そう魔法の才能が一切ないのだ。忘れないでほしい9/10が魔法ができるからって、全員が全員魔法ができる訳じゃないのだ。1/10は魔法が使えないのだ。運悪く俺の血筋は魔法関係の人間とはつながらず、つまり先祖がみんな、“ただの”人間なのだ。

「俺に、魔法が使えない俺にどうしろって――」

そこまでいって俺の言う言葉は閉ざされた。

「――知っています」

「・・・は？じゃあなぜ俺は此処に居る！？」

「それについては、わしが説明しよう」

「・・・」

「又シには特別な力が宿っている」

「・・・は？」

拍子抜けだった。だいたい、俺をかつさらった理由が、「特別な力」だなんて、ふざけてる。

「・・・ふざけるのもたいがいにしるよ？俺は帰ってからやらな
いといけないことが——」

『——だまれっ！！』

「——っ！？」

・・・なっ。なんだっ！？うそだろ！？か、体が動かない！？こ
れは・・・魔法なのか・・・！？

うつむいた時分かった、か・・・体が、震えてる！？こわばって
る！？文章に書いたらたった3文字の言葉なのに・・・。

「落ち着いてもらう。すまんなすこし大きな声を出して」

コレが“すこし”なのかよ・・・。

「・・・っ。い・・・え・・・俺が・・・悪い・・・です・・・
・取り乱して・・・すみません・・・
・」

「まずは、此処にキミを呼んだのはわしだが・・・突然ですまな
い。さて、キミは受験の時一度此処に来たことがあったね？」

「・・・はい」

そう、俺の小さいときの夢は魔法使いだ。何かのテレビの特撮を
見て思ったんだろう。受験に来て俺には才能が無いって聞かされて
正直、ショックだった。一晩中泣いた記憶がある。

「ふむ。その時はまだ分からなかったが、必ず“ある機械”に触
れてもらうのだが、その機械は魔法の量を数値として表わすことが
できるものなんだが、普通は1以上あるんだよ。この学院では50
が最低ラインでね。・・・その結果がキミ場合『-300』なんだ
よ」

「・・・？」

ま、マイナス・・・300？

「不思議な結果だね。目を疑ったよ。・・・何回かそのあと測ったのを覚えているかい？」

「・・・たしか、受験の終わった後数日間何回か家に訪ねてきては俺にちいさな体温計みたいなものをつけられていたような・・・。」

「・・・（コクコク）」

「なんと測つても同じ結果がでたよ。わしはそれが何かいろいろ試した。そしたら、その志士君から聞いてね」

志士「・・・？この鼻歌女のことか・・・。」

「キミに触れると魔法の絶対値が一定時間2倍になるんだよ」
「んなっ！？ってかそれをどうやって調べたんだ！？」

「ふふっ。寝ているときにそつと」

「・・・っ」

「こえーよっ！？」

「さて、キミにはこの学院で、生活してほしいんだが・・・。どうかね？むしろ、その能力を誰かに悪用されると困る時もあると思ひ、なにより、キミはこれから狙われるかもしれない。それをわしらが守る。・・・悪い話ではないと思っけどね」

「・・・つまり、俺の身を守る代わりに、力をかしてほしいってことか・・・。」

「・・・わかった。ただし、俺を守ってもらっぞ？」

「そうか・・・わかった。歓迎するよ、如月くん。そしてキミを全面的に守ろう」

このとき、俺は少し楽しみでいた。・・・このあと、波乱万丈の日常が待ち受けているのも知らずに――。

外伝 天壤家イマダ絶エズ（前書き）

外伝ですので、飛ばしてもみなくてもいいですが、のちのち本編にかかわりが出てくる予定です。

外伝 天壤家イマダ絶エズ

「・・・特別な力があるのはうれしいというか、なんか自惚れるというか」

話が一通り終わり、あの志士とかいう女性が案内してくれたのは学生寮だ。なんだか俺の部屋がもう用意されていた。・・・これっではめられたんだよな、編入することを見越してじゃないとできないし。しかし、まあ――

「触れると、一定時間触れた相手の魔法絶対値が2倍って、正直喜んでいいのか分からないんだが」

たしか、あの志士ってやつこいつも言ってたな・・・

「あなたの、能力は直接肌と肌をくっつけなければ発動はしません。つまり、手と手を合わせたりするとか、はたまたキスとか・・・んもう、その先のセツ――」

「――ああああっ！！もういいです！もう分かりました！」

「分かっただなんて・・・キヤ」

「『キヤ』ってなんですかっ!？」

「もう・・・大人のレディにみなまで言わせるだなんて。キミって意外と、ダ・イ・タ・ン♪」

「あなたって、ほんと教師ですか・・・？」

そう、この人物は教師だったのだ。ちなみに、俺を誘拐するときの鈍器のような物でたたかれたような衝撃はこの人の魔法だそうだ。「ええ。立派な教師よ。つついにて、なんだけどキミのクラスの担任になる予定ね。此処であなたの素性を知っているのは私と理事長だけだからね」

「・・・そ、そうですか」

・・・はあ、肌と肌を直接！？変態になっちまうじゃんか俺！

「まったく、いまは、そんなことより一刻も早く魔法の勉強をしなければ……。」

「なあ〜にが、「私が担任になる以上、受け持った生徒は平等にします。つまり、あなたにも平等です。もちろん、問題を指定して、答えてもらうことも……ふふ」だ。完全に、遊んでやがる。俺が常識問題を間違えて笑われる、そんな予想をしてるんだろう。」

「まあ、なめすぎだろ。いちお冥学の出身だからな。こんな教科書なんて、一回で……。」

「……………」

「前言撤回。無理、ってか、教科書の『初めに』の部分ですら何を言っているのか分からん。チクショウこうなることを見越してアイツ、俺に高校の教科書を渡しやがったな……。」

「こつなつたら、もう何が何でもやってやる。」

「理事長、いちお部屋に送りました」

「そうか、御苦労」

「私が述べるのもなんですが、あのような者に、あの“剣”を渡してもよかったですか？」

「私が彼、如月一茶を送るときに理事長が渡した“剣”を思い出していた。」

「…………その気持ち分かんでもない。だが、アレは彼に渡すべきだろう。なんせ、此处はもともと“天壤家”が作った学園なんだからな」

「しかし！『封魔の剣』は彼には早すぎます！」

「ふむ……彼が自分が本当に特別な力だけで呼ばれたと、思っている以上、まだなにも、しなくていいだろう。それにあの剣もまだ反応していない。今はただの魔よけの道具にすぎんだろう」

「…………ですが、もし彼が——」

「——になったら、わしが奴の息の根を止める」

「——っ。分かりました・・・」

私は、改めて彼の背負っている物の重さを感じた。

『天壤家——それは、唯一魔法組織に対抗できた人間たち。彼らは魔法が使えない代わりにある物を作りそして、発見をした。魔法の技術、そうあらゆる学者が研究を重ねても分からなかった魔法の原理を解き明かしたのだ。『禁書目録』——インデックス——を作り上げた。』

彼らは魔法を利用し、世界を一遍させようとした。触れれば2倍に、はたまた0に、自分の物にもできた。いまわ、途絶えてしまった。』

「ってなんだこれ？歴史の教科書に載ってるけど・・・」

なんか触れれば2倍って俺に似てるけど、違う・・・よな？途絶えたってあるし、だいたい0にできないしな。

「さてつと、次は数学でも・・・」

このとき、これ以上深入りはしなかったが、一茶はある項目をみのがしていた。

『完全に途絶えてはいない。彼らはまだ生き続けているのだという』

外伝 天壤家イマダ絶エズ（後書き）

なんか困惑してすみません。

次話はしっかりとします。

夕暮れに輝いて

この学園に来て、此処の学生寮に入居して早1週間。ん？その1週間の話はしないのかって？？しないんです。そして、ないんです。物語が。というのも外出しても知らない生徒ばかり、今は春休みで2週間の休みだからあまり生徒はいない。今現在、あと1週間をどう過ごそうか絶賛迷い中です。

まあ、せつかく来たんだから学園の中をいろいろ見て回ろうかなと思ったけど・・・なんか、気まずいんだ。さすがに、幼稚園から大学までの仲だけはある。そとを歩けば「あの人だれだろう」なんて噂される。それに、このバカでかい剣・・・なんだよ、コレ。形は十字型によく似てるけど、つかの部分は短く、刀身は長い。まあ、意外と軽いんだが・・・。

「って、んなことどうでもいいか。・・・マジでどうしよう」
そんなことを考えていたら、不意に腹が鳴った。

「そういえば、もう昼か・・・。なんか買いに行くか」
財布の中身を確認して、一茶は部屋を出た。

「ってか、学食食えんのかな？俺・・・」
ここ1週間は、コンビニで買っていたが、さすがにコンビニ生活は厳しい。金銭面で特に厳しい。だいたい、学園に行く途中にさらわれたのだから無理もない。金なんて必要最低限しか常備していない俺にとっては、やはり安いほうが魅力的なのだ。

「・・・よく考えたら、俺学食できる場所知らなくね？」
ふむ、ミスった。誰かに聞こうにも人見あたらねえし。どうすつか・・・。

「……まあ、歩いていれば見つかるだろう。うん、見つかる」
こう思ったのがそもその間違いだったのかもしれない。いや、
学食判断が間違っていたのか？

「……まよった」

歩いて早1時間、ここどこ？迷ってます。あなたならどうします？
？見知らぬ土地で、迷子になったら。まずは引き返す？……うん、
妥当な考えだ。来た道を引き返そう。……なんてね、もう引き返
しました、はい。引き返して迷ってます。とりあえず、一休み一休
み。……なんて切羽詰まってるときにのんきなこと言ってられる
バカじゃないんです。……あ、知ってました？一休さんの『一休』
って別名なんですよ？実名は宗純っていうらしいです。一休と宗純
ってだいぶ違いますよね。

きつと俺は馬鹿だ。こんな状況で、雑学なんて、俺バカだ。

「はあ〜」

どうしたもんか。腹減って、動き疲れた。時計を見れば5時30
分……家を出て6時間か。パソラッシュ俺もう眠いよ……。こ
うなるなら「ジャソプ」と「マガジソ」読み返してればよかった。
ベンチに腰をかけ、明日のジューみたいに「燃え尽きたぜ。真っ
白に」なんてぶつぶつ呟いてたら――

「……あの、そんなところで寝てると風邪……ひきますよ？」

「ん？」

「あの、えっと、どうかしましたか？」

「えっと、迷いました」

「？」

「道に迷いました」

「……迷った？」

「ふあい。転入してきたばっかです」

顔をあげるとそこには――

「そうですか。……んっしょ。私が案内してあげますっ」
とても可愛い少女が、いました。

「・・・」

「あの、迷惑でしたか？」

「い・・・いえいえっ！とんでもないっ。ぜひお願いします!!」

「はいっ。ええつとですね・・・いちお自己紹介をしておきますね。わたしの名前は月島瀬名っていいいます。よろしくお願いしますね」

「あ・・・えつと、如月一茶。よ、よろしくっ」

きつと、こういう女の子を美少女っていうんだろう。とても神秘的で、周りはさむく薄暗くなっているけれど、彼女の周りだけは輝いて見えた――。

夕暮れに輝いて（後書き）

短くてごめんなさい。

あと、読んで下さった方、ありがとうございます。

迫る影

「本当に、あんな貧弱そうなガキが“あの”末裔なのかよ？」

『ああ、そうだ。今は此処に来て日も浅いそれにまだ、なにもあいつは知らないだろう？自分のことを』

「・・・まあ、てめえの情報が正確ってことは分かってる」

『それは喜んでもいいところなのかな？』

「ああ、信用はしてる。・・・さつさと始末するか」

『あくまで穏便だぞ？』

「うるせえよ。俺に命令してんじゃねえ」

『・・・』

くくつ。アイツの下に火い撒き散らして、慌ててるところに首に刃を押しつけて終いだ。どんな声だして泣くんだろうなあ・・・。

「・・・くくつ。」

じゃあ、開始だ・・・。

「——っ!？」

『どうした？』

「・・・ちつ。他に生徒だ」

『・・・退け』

「ああ!？ふざけんな!あいつら2人殺りやあいいだろうがつ!」

『あくまで穏便だ。それに殺る機会ならまだあるだろう?』

「くそがつ!」

『急ぐ必要はな——』

イラつきのあまり手に持っていたケータイを握りつぶした。

「あゝ あああむなくそわりい」

あそこで邪魔入んなきゃあ殺れてたのによお・・・。

「・・・如月一茶、いや、今は邪魔をした——」

ニヤと不気味な笑みを浮かべた男は暗闇に消えていった。

“——月島瀬名を殺る・・・”

「・・・んんっ」

カーテンの隙間からさしている光に一茶は起こされた。

「ふぁゝ・・・ねむ。ってか昨日は月島さんに迷惑になったからなあ。よしっ、今日はお礼に行くとするか」

それに少し顔見たいし・・・。ん？下心満天ですけどなにか？

——ピンポン

「——っ!？」

び、びっくりしたあ。ってかこんな朝早く一体・・・いや、知り合いなんて志士先生か理事長、月島さんしか、いないんだけど。

「はい。今行きまーす」

適当な返答をして玄関に向かった。

ガチャとおなじみの音がする一般的なドアを開けて——

「やつほお。久しぶりい」

志士先生だ。

「あ、えつとお久しぶりです、先生」

「志士先生・・・あの、やっぱり僕はお邪魔しないほうが・・・」

「・・・？」

誰だ？見たことない人だな。

「なに言ってるんのさあ、柴先生？いちお、“副担任”として挨拶くらいはしておきなさいよ」

副担任??もしかして・・・

「あの、その方は俺の入るクラスの副担任の予定の方ですか？」

「ん？そうそう、新任教師なんだけどね」

ニコニコしながら志士先生は続けた。

「結構、新任テストとか、魔力絶対値が多くてね。あたしの持つクラスの副担任になったってわけ」

「そうなんですか。・・・あ、えつと、如月一茶といいます。よろしく願います」

「あ、うん。こちらこそ。柴 圭太っていいいます。新任で副担任をやらせていただきます。いたらぬ点も数多くあると思いますが、よろしく願います」

「・・・すごく礼儀いいですね。どこかの先生とは違って」
横目で志士先生を見てやると――

「だ、誰のことかな？如月クン??」

怒りマークが3つくらい出てそんな顔で聞いてきた。

「さあ、礼儀がなくて、不作法で、おまけに鼻歌が下手な女教師っていったい誰なんでしょうね？」

ギリリと音がしそうなくらいな顔で俺を見ていた。

「あ、あの、お落ち着いてください、志士先生」

まあまあと、隣の柴先生がおさえていた。

「あの、それで話ってこれだけですか？できれば俺起きたてなんで、早く着替えたいんですが」

「あ・・・ああ、これだけだ。後6日だ、しつかり勉強しとけよ？」

「了解。つてかもうだいたいオケですよ」

この言葉を聞いて「そうか」と言葉を残し柴先生と戻って行つた。

「さて・・・月島さんの部屋も教えてもらったし、食堂も場所は把握したし・・・。さて、何か昨日の御礼を持って行っていくとするか」

「ん？思つたけど女子寮って男子入っていいんだろうか？」

お菓子を少し持っていくことのした一茶は考えていた。そう、このまま女子寮に入ってしまったら変態扱いのされなにより、下心ばれになるからだ。

「・・・あつ」

女子寮に行く途中に人を見つけた。・・・確か今日部屋に来ていた、柴先生だよな？何してんだろ？？

「柴先生。こんにちは」

「ん？あ、こんにちは。確か・・・如月君だったね」

「はいっ。あの・・・先生はこんなところで何を？」

「僕ですか？僕は、場所を覚えようと思ってね」

なるほど・・・ひろいもんな、此処。

「それが、少し迷ってしまつてね」

あはは、少し同情しますよ、なんて言えないから・・・。

「実は僕も昨日迷ってしまつて。ある女子生徒に助けてもらったんです」

「・・・なるほど、今からその女子生徒に会いに行く途中なんだね？」

「えっ！？なんで分かつたんですか！？」

「だってこの、道をまつすぐに行く女子寮でしょ？それに、ホラ」

と、言つて柴先生は俺の手の中にあるお菓子をさした。

「あはは・・・ばれちゃいましたか」

ふむ・・・かなり恥ずかしいぞ。

「ふふ、あつてもね？勝手に女子寮は・・・」

「あつ・・・やつぱりまずいですか？」

「うん。初めに職員室に行つてから許可を取らないと」

「なんかめんどくさそうですね」

「はは、でも間違えられるよりかはいいと思うよ？」

「そうですね。あはは、ありがとうございます。此処で先生にあつてよかつたです」

「がんばつてね。・・・グッ・・・」

なんか、励まされた・・・。

「つと、早く職員室に行くかな」

意気揚々の一茶だった……。だが、一茶はこの後後悔することになる、そう、大事なものを“落としていた”のだ――。

落し物

「・・・あゝ、職員室による必要があるなら、初めから聞いときやよかった」

まあ、仕方ないか。何せこんな短い期間なのに知り合いができるなんて思ってたしな。

「それにしても、遠いよな。ここからは」

ん。それよりこのこと、なんて先生に報告すればいいんだろう・・・。

「困った」

なにも考えてなかった。でもま、志士先生に話を通せば分かってくれるか。ってか本当――

「――柴先生はいい先生だよな。人当たりいいし」

きつと、ああゆう人がモテるんだろうな。・・・なんか嫉妬するな。少し見習ってみようか？

歩いて男子寮から約20分。あらぬ、バカな妄想をしていたらすぐに着いた――気がした。

職員室はいちお、月島さんに教えてもらってるから場所は分かるけど・・・。

「お？一茶じゃないか、どうした？こんなことで？」

タイミングいいことに、前から志士先生が歩いてきた。

「あ、志士先生！いいところに」

「ん？」

「あのですね。女子寮に入るのを許可していただけませんか？」

「・・・は？」

うつわ・・・すっげー飽きられてる。

「・・・あのですね、親しい女の子ができたもので」

「・・・ほほう。であっていきなり、うちの生徒をたぶらかすな

んて」

いや、あのセンス？

「まあ、男だからなお前も」

「あのですね？だから、女子寮の——」

と、ここまで言つて先生は遮つた。

「聞いてるよ。ん？でも誰がそんなこと言つたんだ？許可なんて」

「・・・？」

「許可なんて取らなくていいんだぞ？」

「いや、だつて柴先生が」

「・・・？」

は、話がかみ合つてない？

「・・・・・・」

待てよ？あの時あの先生はなんていつてた？

『この道の先は女子寮ですよ？』

なんだ？なにか忘れてる・・・？思い出せよ。あいつが言つてたことを、あいつが・・・、あいつの矛盾を！？

「・・・ツ」

目の前に居る先生の存在を忘れて、急いで自室に戻つた。お菓子なんて、もう、どうでもよかった。

「はあ・・・はあ・・・はあ」

本気で走つていた。いつ振りだろう？此処に来て、いや？結構前から本気なんてだったことなかった。

「ちくしょう、なぜ気付かなかった！？」

俺は馬鹿だ。浮かれてたんだ。この学園に来て少し、いや、かなり浮かれてたんだ。でも、今俺がやろうとしていることは、確証なんてない。

「はあ・・・確証なんてどうだつて・・・はあ、くっ・・・いいん、だよな？」

歩くより2倍はやく学園から帰った一茶は、玄関の壁に立てかけてある“あの剣”に手を伸ばした。そしてその剣を背中に背おり――
「・・・頼むぜ？見た目はかなり、切れ味いいんだからさ！」
一息つくなんて考えていない。いや考えるなんて、論外だ。

一茶はそのまま、部屋を駆け出して行った。そのあと、部屋によった人間がいた。この人間がこれからの一茶の運命を左右させることなんてまだ“一茶”は知らなかった――

“一茶、キミにはまだ彼の相手は早すぎる。賢いのは認めるけど、そこがアブナいんだ――”

Flame hell (フレイム ヘル)

一茶は瀬名の行方を捜し走っていた。なぜだかイヤな予感がするのだ。

「はぁ・・・女の勘・・・ならぬ、男の勘ってか」

冗談を言っている暇はないのだが、できれば冗談であってほしいと思っていた。さすがに、見た目より軽いといっても、全力で走れば重く感じる。・・・どんな、別腹のケーキであっても、100個食べれば、さすがに重く感じるだろう。

「はぁ・・・、ってか当てずっぽうじゃ、全然だめか!？」

もう、結構な数の場所をあたっている。女子寮に行き、月島瀬名の居場所を聞いてみたけど、答えは「年生に呼ばれてた」だ。なぜ？ だいたい、あいつの狙いはなんだ？

「・・・くそつ。どこだよ!？」

月島瀬名はある場所に連れてこられていた。

「あの・・・、柴先生、ですよね？ えっと、なにか私に用があるんですよね？」

ここは、女子寮から歩いて20分たったところだ。人気が無く、しかも呼び出された場所は、小さな小屋のようなところで、窓が一つ、周りには木が生えていて光が届かない。

普通の女子なら気味が悪く近寄ることはないだろう。

「・・・そうだな。キミは僕の邪魔をしたんだよ」

口は笑っている。けれど目は笑っていない。ということはこういうことなのだろうと、瀬名は思った。それと同時に背中に悪寒が走った。

「あの・・・邪魔、というのは?」

「キミに言うつもりはねえんだよ」

「っ!？」

いきなり口調が変わった柴先生はとても不気味で殺気がみなぎっていた。と同時に、足が震えだした。

「面倒なんだよ。お前のせいで、この任務が長引いてよお。だからさあ——」

「——死ね!!」

この空間に響きわたる声だった。そして、息を吸い、地面に手をつき、詠唱し始めた。

「『彼の地に、熱を!燃えたぎる火の、炎の海を!』」

(火炎魔法!?)

「燃え果てろ!悲痛な叫びを、俺の耳に聞かせるおお!!」

「『Flame hell!』!」

こう叫んだと同時に、瀬名の足元に大きな魔法陣が広がった。そして——

「!?!?あ・・・っ。くっ」

火というには優しいくらいに激しい勢いで燃え始めた。その熱さに瀬名は声にならない叫び声をあげた。

「ははははあ!死ねしねシネえ!やけはてろお」

「くう・・・『水面に浮かべ、彼の地に水を、川を、海を!』」

「『Surface water!』」

どこからともなく、瀬名の真上に大量の水が、浮かびそして火の上に落ちた。

プシューと音を立てて、相手の魔法陣に浮かぶ炎を消した。

「ちっ。めんどくせえなあ。お前、水系の魔法使うのかよ。殺し損ねた。ってか、さっさと死ねよ。死んだら楽になるからさあ!!」

もう一度詠唱を唱えようとした。そのとき——

「ちくしょうつ。ちくしょうつ。ちくしょう!」

どこだよ!?!どこだよ、どこだよ!?!。。。

「っ!?!」

なんだ?あそこ、赤く照らされてる!?

「一かばちか」

「はあ、はあ、なんだ此処?こんな小さな小屋、あつたっけ!?!」
小屋のドアを開けようとした時。

『さつさと死ねよ。死んだら楽になるからさあ!』と聞こえた。

——ビンゴッ。

ドアを開け一茶は——

ガタン!という鈍い音がして。

「そこまでだっ!くそ野郎!」

瀬名は信じられなかった。なぜなら、そこには一回会っただけの男の子がいたのだから。

「助けにきたぜ!月島さん」

「あ、え、如月・・・さん?」

「ん。月島さんを助ける。柴あ、お前はゆるさねえ」

ついに決戦、一茶は、勝つことができるのか?

Flame hell (フレイム ヘル) (後書き)

Flame hell 英語直訳で『火炎地獄』 Surface
water 英語直訳で『水面』

逃げた先には

目の前に居る男が、ついさっきまで尊敬し、一度は見習いたいな
ど思った人間と同一人物なのだろうか。一茶は、目を疑いたかった。
——いや、正直一瞬、別人だと思った。なぜなら、ニコニコ笑って、
礼儀正しく接してくれるような面影が無かったのだ。

「あんた、本当にあの柴先生なのか？」

「はあ！？なにいつてんの？お前、バカ？」

「……」

俺はきつとバカだ。……月島さんが襲われてるんだ。そんな状
況なのに——、相手は誰だっていいだろ！

「つてかさあ、やっぱお前から2人殺ることになったじゃねえかあ
！あゝあ、時間の無駄つてかあ！？」

「……お前の目的はなんだ？」

「目的い！？あはははっ！こりゃあ、爆笑もんだぜえ」

柴は俺をニコニコではなく、にやにやしたような笑みで見てきた。
「てめえを、殺すためだろうがああ！！！」

「——！？」

俺を！？……まで、そこは、後でいいだろ。今確認することは、
1つだ。

「……ぜだ」

「んあゝ？聞こえねえよ」

「なぜ、月島さんを狙ったんだって聞いてんだよ！！」

そう、今確認することは、俺を狙うのになぜ、無関係の月島さん
を狙うのだろうか。

「……つまんねえ」

「……？」

「つまんねえよ。お前。なんだよ、自分が命狙われてんのに、他
人のことを心配するって、お前、つまんねえ」

こいつ、狂ってる。なんなんだ、こいつ。近くに居るだけで、源至言（理事長）には及ばないが、そのような、覇気が感じられる。「まあ、いいや。こんなにラッキーなんだ、さっさと終わらせてやるか」

そして――

「――彼の地に、熱を！燃えたぎる火の、炎の海を！」

「『Flame hell』！」

突如、足元に壁画のような物が広がる。と同時に、炎が舞い上がった。

「――んな！？あつつ！？」

なんだ、これ！？コレが魔法！？無茶苦茶だ！

「如月さんっ！『水面に浮かべ、彼の地に水を、川を、海を』！」

「『Surface water』！」

――ざぱっん

今度は水かいな！？つてかさむ！温度差激しすぎでしょ！？

「大丈夫ですか！？如月さん」

この反応だとこの水は月島さんの魔法らしいな。

「う、うん。ありがとう、助かった」

「つち。やっぱ、月島、お前から殺るべきかあ！？」

教科書をみてたとはいえ、実際に受けるのでは訳が違うな。

目の前では、瀬名と柴の激戦が繰り広げられている。じゃっかん、いやだいぶ、月島さんが押されてるな。

初心者でも見てわかるくらいに、瀬名の表情は曇り、きつそうだった。

でも――、少し分かった。目の前の実戦と、教科書の基本を照らし合わせれば……。

一茶は、大きく息を吸い込み、そして――

「月島さん！！俺のところまで、魔法を使わずに来てくださいっ！――」

「えっ！？」

当然相手にも聞かれただろう、けれど、俺は続けた。

「月島さん！俺を信じて！！」

「・・・はいっ。分かりました」

「ばかかぁ！？隙だらけだぜえ」

柴が詠唱をして魔法陣を展開する、が、俺は月島さんと合流したらとつさに思いつき走った。そして――。

「はっ。柴、あんたの魔法は範囲が決まってるもンばっかだ。つまらねえのはあんたのほうだろ！？」

そう、柴の展開する魔法陣にはしっかりと範囲があつた。そしてその魔法陣に入らなければ、攻撃は一切当たらないのだ。

「っ。めんどくせえ。調子のもてんじゃねえぞぉ！」

そして多くの魔法陣をつくり、俺たちを追つていった。そして――。

「ざぁんねでしたぁ。もうお前の負けえ。鬼ごっこ、楽しかったかい？」

「「はぁ・・・はぁ・・・はぁ」」

俺と月島さんの体力はもう限界だった。助けがくるまで待てなかったのだ。

「くそ・・・」

一角に追い込まれた一茶たちは、もうなすすべもなかった。

「さようなら。うざったいガキども。これで任務終了――」

にやりと笑った。――のは、一茶だった。

「は！？」

「追いつめたと、おもったか？」

「はぁ！？此処にきてハツタリか！？つか、命乞いしようぜ、ガキ」

「追いつめたのは、こっちだったの」

「うざ・・・もう詰まんねえよ、おまえ」

「それより、さ、なんか、息しずらくねえか？」

「は？」

一茶は剣に手を伸ばした。

「しつてつか？火をある個室空間で炊いて、酸素が薄くなり、低酸素空間になりその場所に急激に酸素を入れると爆発を起こすって」

一茶は剣を持っていないほうの手の人差指で頭をさし――。

「『バックドラフト現象』って言うんだ。頭、使おうぜ？」

剣で隣にあった窓ガラスを一茶は思いっきりたたき割った。

――と、同時に大爆発が起きた。

「チクシヨウ、あの餓鬼い！？ふざけやがって」

ダメージは大きいが、死には至らなかった。

「ちつ。あいつらは死んだだろうから、もうおわ――」

「終わりなのは、お前だ。柴」

首筋に剣先があった。

「あ!？」

チェックメイト

「王手だ」

一茶は、力いっぱい剣を振り上げた――。

逆転への落とし穴（前書き）

遅くなつてすみません。

逆転への落とし穴

「終わりなのはお前だ。柴」

一茶は、目の前に居る、変貌しきった柴圭太に刃を立てていた。

「なぜだつ。あの時、お前のほうが爆心に近かっただろうが!？」

柴は、目の前に広がる炎を見ながら声をあげた。

「確かに。あの場合、俺がこの手で窓ガラスを割った。つまり、

ほぼ俺が爆心と思ってもいい」

「だから、それがなぜ——」

「——お前は、なぜ俺を、狙う？」

柴の声は一茶の声に遮られる。

「はあ!？今はお前の——」

「——お前はっ!」

荒げた声で、一茶はまたしても、柴の声を遮った。

「俺の能力、即ち、触ればその触れた相手の魔力が倍になる。

この能力があるから、俺を狙う、殺そうとしたんだろ？」

「それが、なんだってんだよ!？ああ!？」

「俺は、あんたの、魔法から逃げる時、ずっと月島さんの手を、

握っていた」

「な!？」

「意味、分かるだろ？触れてたんだよ。そのおかげで、月島さんの魔力は、倍になりそして水の壁を作ってもらうのも、造作もないってことだ」

「な、なんだとっ!？」

「お前は、俺が此処に来て、そして月島さんと一緒に殺して、とそこまで、ルートを考えてたんだろうけどな。・・・浅いんだよ。あんたの読みは、俺は言っただけだぜ?『頭、使おうぜ』ってな」

——蒼白に染まった柴をみて一茶はこう続けた。

「王手だ」

チェックメイト

もう一度強く握った剣で、柴の首元を切り裂いた。――はずだった。

「――え!？」

剣が、剣先が、動かない!？

一茶は、刃と首元をみて、再確認した。

当たってる。当たってるのに、切れてない!？

「くくっ」

突如、柴が不快な笑みとともに、笑いだした。

「あははははっ。こりゃあ、おもしれえ!! あはあゝ、笑いが止まらねえ!!!」

「ん・・・なっ」

柴は、一通り笑うと立ち上がり、一茶を見た。

「よう、お姫様を助けた、王子様」

不快な笑みは、止まらない。

「やっぱりお前は、あの家の血筋なんだなあ、俺を殺そうと決めた時、目の色、赤くなってたぜえ」

そして柴は手に力を入れ――。

「なあ、なあなあなあ、お前――」

「――死のうか」

「っ!？」

いつの間にか、間近にいて、そして耳元で囁いた言葉はとても暗く、そして、背筋に寒気が走った。――と同時に、腹に今まで感じたことのない激しい痛みが襲った。

「――がはっ!？」

気が付いたら、さっき居た場所から数十メートル離れた所に転がっていた。

――殴られた。こう認識したころにはもう一発。

「なあ、お前っ」

「うぐっ」

「俺の読みが浅いって」

「があっ」

「言ったよな!？」

「っぐ!？」

まるで、字にしたら、読点の代わりになるような、激しい痛み——強打が続いた。気がつけば、月島さんは、魔力を使いきったのだろっ、横たわり、泣きながら、俺を見ていた。

「浅いのはな、お前のほうなんだよ!！」

また、殴られた。もう夜中なんだろう、目の前には、今自分に降りかかっている痛みとは裏腹に、きれいな星空が、見えた。

「くくくつ。まだ息あるのは褒めてやるよ。だがな、もう飽きた。だから、もう終わりだ」

骨は何本折れてるだろう。俺は、はたして今本当に息をしているのだろうか？痛みなんて感じない。景色は見える。・・・ああ、結局、俺を守ってくれなかったじゃん、理事長。

月島さんに謝らないと、俺のせいで、こんなのに巻き込まれて。
・死ぬときは、時間が遅く感じるって、本当なんだな。

「——死ねっ」

顔面に、こぶしが落ちてきた。

反射つてのは、やっぱり死にかけでも、出るんだな。

一茶は眼をつぶり、暗闇の中で死を確信した。

「・・・・・・」

あ・・・・れ・・・・？考えることできてる。ってことは、死んでない？いや、でも確かにさつき、死んだんじゃ、あれ？じゃあ死後の世界？あの、報われなかった人間が逝って、記憶を無くした青年がいろいろと解決したりする世界？——って、バカな発想はやめよう。

一茶は現状を確認するために怖々目を開いた、と同時に広がった景色は、地面が結構下にある。高所恐怖症の人がみたらビビってしまっような景色だった。

「あれ・・・・？」

「ん？なんだ、お前こんなにもなつて、意識が飛んでないのか。素晴らしい、生命力だな。まるでゴキブリだ。・・・よし、これからキミには、ゴキジェットという素晴らしいあだ名を、授けよう」
「・・・っ。ゴキジェットじゃあ、ゴキブリ殺してるじゃ・・・ないですか」

「つていうか、この声って——。」

「やつぱり、志士先生じゃないですか」

「やつほ、如月クン。元気してるう〜？」

「この姿をみて、そう言いますか？」

「あはは、ごめんねえ。元気じゃないね」

志士先生は俺を抱えたまま、真剣な表情になった。

「冗談抜きで、キミは大丈夫？」

「・・・はい。いちおは」

「・・・そか」

この抱え方だと、下を強制的に見ないといけないのだが、そこには、柴圭太の姿も見えた。

「少しだけ。ほんの少しだけ、待っててね」

志士はこう言つて、一茶を優しく、そつと、下に置いた。

「私はね。三つ許せないことがあるの。1つ目は、みたらし団子を食べられること。2つ目が、酒を禁止させられること、そして3つ目は——」

志士は、下の方に居る、柴を見つめてこう言い放った。

「——私の、クラスの生徒を、傷つける奴っ！！！」

志士は、腰につけてある、小刀を手に取り、刃を柴に向けて——。
「覚悟しろ？お前は、もう私にとって、重罪人だ」
冷たく言い放った顔は、それこそとても冷たく、周りの気温が下がる気がした——。

少女は、泣いていた。大泣き・・・と、言うのだろうか、いつもは、きれいな瞳も、真っ赤に染まり、その瞳から大きな、しずくが幾度も、幾度も、枯れなく続いていた。やがて、少女は、周りの炎に包まれ、やがて、死んだ――。そう、少女は、死んだ。

(ナゼ?)

それは、俺が、弱いから。

俺は、弱いから。

ヨワイカラ――。

「――はっ!？」

ん? 此処は、どこだ?

「・・・あっ」

思い出したっ。俺は確か、月島さんが危ないから、いろんなところ探し回って、そして、男の勘が当たり相手は柴先生で、戦って、負けて、死にかけ・・・て・・・? ん!? あれ!? 死にかけ・・・て・・・此処はどこ?

「此処は・・・」

「なあゝに、寝ぼけてるの?」

顔をあげれば、志士先生がいる。あつ、思い出した。

「確か、あのあと志士先生が圧倒的な強さを見せつけて、柴を倒しちゃって」

「そそ。そのあと、キミは気を失ったってわけ」

あゝっ。そうだそうだ。んゝ気持ちいいね。時々あるだろ? 大事なことなのに忘れちゃって、それを不意に思い出すと、こう、なんか・・・いいっ! って来るやつ。でも、なんでだろ・・・こんな感

覚は久々だ。俺は、“アレ”のはずなのに・・・。

「まっ、いいかつ。それに、今さっき見てた夢も、なんか、重要だった気がするけど、忘れてるし」

「??」

志士先生が、意味が分からない、というように、首をかしげた。

「それよりも、先生、実はすごく強いんですね、正直びっくりしました」

「ん？まあ、全然だけどな」

こう言っているが、本当にすごいものだった。理事長が来て、少し話をするというので、気になる疑問点は残しておいて、今は、志士先生の戦いを思い出しておこうか、といっても、思い出すほど長くは続かなかったんだよね・・・。

志士先生は、とても冷たい気迫をまとっていた。——気がする。

「・・・ぷっ。聞いて、あきれるぜえ！今度は、あんたが王子様かあ！？」

「戯言はいいだろう。柴、私は、すぐさま、その生徒と今ここに居る、こいつを早く病院に連れて行ってやりたい」

月島さん、そして俺の順番に指を指していく。

「お前には、無理だぜえ！？もう、政権交代ってやつだよお、

源”お」

え！？源？柴は、何を言ってるんだ。

「ほほう、私が、源と知っておいて、その態度か」

「親子ともども、死んでろお！！」

「死ぬのは、お前だ。柴」

え！？居ない！？今、さっきまでいた、志士先生が、居ない！？・・・いたっ。いつの間に、あんなところに。

志士は、数秒とも立たず、柴の背後に回り込んでいた。

「・・・っ」

柴にも気付かなかったみたいで、目を見開いて、驚きを隠せなかった。

「い、つのまにっ!？」

「ふむ、説明してあげようか？いちお私も教師だ」

こう言ったかと思うと、今度はいつの間にか、柴の正面、約10メートル離れた所に、居た。

「私は、たった1つの魔法しか使えない。——つまり落ちこぼれだ。Physical space movement type magic（物理空間移動型魔法）のたった1つ。けれど、この魔法は、とても簡単な魔法の割に、意外と危険なんだ。名の通り、物理系を空間移動することができる。私は、この魔法しか使えないといっただろう？私は、この魔法を鍛えに鍛えた。源家の恥さらしにならないように。そして、私は見つけたんだ、自分自身を移動させることを、つまり、さっき私が、お前の後ろに回ったのもソレのおかげだ」

遠くから見てわかる、柴の様子が変なのだ。顔は蒼白に、そして口をパクパクして、まるで酸素がほしいみたいに——。

「そして、もうひとつ、危険なのがある。それは——」

「——攻撃を、移動させられること」

この言葉に呼応するように、柴の首、胴、腰に一筋の線がプツツと音を立てて、浮かび上がってきた。

「さようなら、新任教師。短い間だったけど——」

「——御苦労さま」

特撮によく出てくるような、血の吹き出し方だった。首から、胴から、腰から、真っ赤な血があふれていた。

「・・・うつ」

血の匂いがする。気持ちが悪い、見たくない光景でも見てしまう、

突然吐き気がしたと思ったら、気を失っていた。

変なのを、思い出したな。ううゝなんかびみょゝに、この場に涼しげな顔をして立っている、志士先生が怖く感じる。

——ガララッ

びくッ……。うん、病室のドアのあける音だな、うん。

姿を見せたのは、理事長の至言さんだった。

「すまなかった、編入の時の守るとまで言っておいて」

久々に、会ったなと思えば、突然頭を下げてきた。

「……。い、いえいえつ。気になさらないでください。それよりも、聞きたいことが、いくつかあるのですが」

「ふむ、答えられる範囲なら答えよう。又シには、大変な思いをさせてしまったからな」

「まず——」

「——月島さんは、大丈夫なんですか？」

「「……………」」

黙ってしまう2人に、俺はなぜか不安を覚えた。

『“また”守れなかったのか——』

——と。

エピローグ

沈黙が続く中、俺のつばを飲み込む音だけが、聞こえた。

「・・・あ、あの」

「ふむ。まあ、又シならそういうと、思っておったよ」

「へ？」

予想外の返答に、少し変な声が出た。

うん、ちよっと恥ずかしいじゃないか。

「あははっ。キミはやっぱ面白いね。自分のことよりまずは、友達のことって」

「え、っと・・・普通じゃないですか？」

普通のはずだぞ？うん。なにもおかしくは、ないぞっ。・・・たぶん。

「ふむ。キミの思っていたような状態じゃないよ。怪我也見当たらないし、又シが速く駆けつけてくれたからだろう。感謝するぞ」

「感謝もなにも・・・。俺のせいで狙われて、合わせる顔がないといえますか」

「だいじょーぶ。月島さんは、とくに何も感じてないって。それより、なんか助けに来てくれた時のキミがカッコよくて、忘れられないんだと」

「か、カッコ・・・」

なぜか、顔が熱くなるような気がした。ってあれか、きっと恥ずかしいんだな。

「へー、キミのようなお堅い人間でも、照れる時ってあるんだね」

「よ、余計なお世話ですっ」

「話が盛り上がってるところすまないが、又シの質問はそれだけかね？」

「あっ、すみません。次、いいですか？」

月島さんのことで、少し気が楽になった気がした。

それに、志士先生も、気を和らげようとしてくれたんだな、きつと。

「・・・俺を、狙っている、人たちの事を教えて下さい」

「人・・・“たち”？」

「はい、グループ、みたいなものではないんですか？」

「又シは何故グループだと思ったのだ？」

「それは、柴が言った言葉からです。俺が死んだと柴は思った、そのとき奴は『これで任務終了』と言いました。任務ってことは、誰かの命令で動いているって意味です。此処からの推測です」

「ふむ・・・」

「へ・・・」

目の前にいる2人は、感心したような目つきで俺を見ていた。なんか、くすぐったいぞ。

「さすがは、学年2位の成績だったってことはあるね」

「うむ。又シの推測通り、奴らはグループで動いておる」

・・・あまり当たってほしくない推測が当たったな。これからの生活が、少し怖くなってきたぞ。

「そのグループはなぜ、俺を狙うんですか？俺の能力が原因なんでしょう？」

「・・・そうだ。又シの能力が原因だ。此処に、招かなければ、又シは極一般的な生活を送っていただろう。すまない」

「いつ、いえいえ。今更ですよ。だいたいそれも、分かってましたし」

「・・・？」

「だって、初対面の相手に、『又シを守ろう』なんて言う人なんて普通居ませんし、きつと何かあるんだろうなってとらえてましたから」

「あえて、何から、というのを聞かなかったと？」

「はい。どうせ、あの時俺が、『何から守ってくれるんですか』なんて聞いたら、たぶん答えてくれなかっただろうし」

「ふむ・・・まあ、そのグループについてなんだが、詳細はまだつかめておらんくての。ただ、そのグループ名は判明している。Broken clockブロークン クロックそれが名前だ」

「・・・Broken clock（壊れた 時計）ですか」

「情報が少なくてすまないな」

「グループ名が分かっただけで、十分です。じゃあ、最後に・・・」

「・・・？」

どうしよう、聞いてしまおうか・・・いや、聞いておこう。うん、気になって、気になってしょうがなかったんだ。よし――。

「至言さんと、志士先生って、家族なんですか？」

「・・・は？」

おお、見事にハモツた。・・・あ、知ってる？ハモツたって、語源はハーモニーなんだって。だから、ハニるでも、いいらしいぞ。

「言っていないかった、か？」

「言っていなかったんです」

「実は、家族なんだよ」

「そうなんですか」

最後にどうでもいい質疑応答で終わった面会は、異様にさみしかった。

あつ、そうそう、なんか、母さんと父さんが、心配して来てくれたことが、嬉しかったな。病室に入っていきなり、「髪の色は大丈夫！？」にはびっくりだ。もつと、心配してくれるとこ、あるだろうに・・・。

月島さんは怪我がなく、至って健康そのものなので、少し病室に顔を出してくれた。なんか、俺の顔を見るなり、赤くなって、すぐに「失礼しました！」なんて言って、帰るもんだから、なんかものすごく傷ついたことは、秘密だ。しかし、何故？もつとゆっくりしていけばいいのに。なんて思っただけけど、言う前に逃走。言えないのだ。

とまあ、なんやかんやで、楽しいような、憂鬱のような、5日間が終わり――。

「やってまいりました、始業式いゝ」
卒業式もしてないのに、高校に入学ってなんか新鮮だな……。あのときは、こんなことになるなんて、思ってもいなかったからなびつくりだ。人生なめちやいかなね。

「さつて……。どうすつかな」

月島さんに教えてもらったのは、中等部なんだよな。高等部なんて、教えてもらってないし……。

考える人のような感じで、うずくまっていたら、背中から声が聞こえてきた。

「あつ、き、如月さゝん」

「んあつ？あつ、月島さんじゃないですか」
グットタイムーングッ！

「瀬名あゝ？この人、誰？見かけない人だけど」

「あ、えっとね、この春編入する――」

「――如月一茶です」

自己紹介ぐらいはしておかないと。初めが肝心って言うでしょ？日本人ってなんか、いろいろな名言残してるよね。たとえば、諦めたらそこで試合終了ですよ、とか！ほらっ、あの、バスケのあれっ！！

「如月さん、こっちは友達の――」

「――遠峯鈴とみねりんです。よろしく」

「はうっ。2人して、私の言葉を遮って……」

「あはは、んじゃ、よろしく、遠峯さん」

こう言って、俺たちは、手を握った。――はずだった。友達になるはずだった、のに……。

トンッ。

「おっ。わりっ」

後ろを通りかかった生徒に、俺は背中を押された、と、同時に、

なにか手に柔らかいものが。

「・・・ん？なんだ、これ？柔らかいような、かたいような」

フニフニ・・・ん？あ、れ？なんか、俺の手の延長線上に握手をしたはずの女の子の胸があるんですけど・・・。

鈴は、顔を真っ赤に染めて、俺を見ていた。

「・・・こつ。この」

「こ、この・・・？」

こんなアニメな様な展開初めて見た。いや、してるのは俺なんだけどね？

「このっ、変ーーーー態ーーーーっ！！！！」

「ですよーーーーーっ！！！！！！」

バチコーン

いやゝいい音っ！俺の、頬！！頬鳴らし大会なら、優勝だぜ？・

・考えると、涙出る。何故だろう、母さん、父さん、俺、早死に夕

イプだな・・・。

エピソード（後書き）

入学編は此処までです。

次もあるので、よろしくお願いします。

キャラ設定紹介、今後のキャラ設定紹介（前書き）

今更で、すみません。

キャラ設定紹介、今後のキャラ設定紹介

物語の主人公：如月一茶^{きさらぎいちや}

年齢15歳のごくごく普通の男子高校生。ただ1つ、違うのは魔力保持者の体に触れることで、その者の魔法絶対値を二倍に上げることができる。髪の色は、銀というより、白に近い。頭は良いのは訳があるらしいが……。家族構成は、両親と、妹が一人。

大人しいクラスのアイドル：月島瀬名^{つきしませな}

年齢15歳、水系魔法が得意分野の女子高生。才色兼備、頭脳明晰で、親切かつ、それを棚に上げない性格が人気の1つ。魔学の彼女にしたいランキングで上位5位に居るとか……。髪の色は、薄い青で、肩まであるセミロング。一茶が狙われた事件に巻き込まれたことで、一茶と仲良くなる。が、今は、瀬名にとって、一茶は友達以上の感情がある、らしい。家族構成は、両親と、兄が1人。

ツンデレ系、アイドルの親友：遠峯鈴^{とおみねりん}

年齢15歳で瀬名の親友の女子高生。かなり小さいときに、瀬名に知り合ったとか。言いたいことを、すぐには言うことができず、ただ馬頭だけはすんなり口にでる、素直じゃない子。主人公の一茶とは、不意の事故(?)で一茶が胸を触ってしまったため、嫌っている。髪の色は、黒で腰まであるロング。家族構成は、父の一人。何やら、瀬名にも隠し事があるらしいが、それはまだ少し先の話。

理事長の娘であり、プライドの高い教師：源志士^{みなもとしし}

年齢不詳だが、今の若い姿は、取り繕ってる姿らしい。英雄の父、至言の名前を気づつけまいと、ただ1つの魔法に鍛錬に鍛錬をかけた。教師の中での実力は、1位2位を争う。

元英雄、魔学の指揮者：源至言みなもとしげん

年齢は100歳を超えているという、噂だが本当のことは誰も知らない。昔、魔法の力で、約2000人の人々を助けたことで、英雄と呼ばれた。その後、行方を暗まし、今は魔学の理事長となっている。

元後輩かつ現後輩！？：榊原夏帆さかきはらかほ

年齢14歳で、主人公が冥学に居た時の後輩。一茶が誘拐される前に転校ということで、学校を去ることを一茶に伝えたが、その転校先は……。魔法の知恵はほぼ皆無だが、冥学に居た時の頭の良さで、理解力は人一倍高い。髪の色は、じゃっかんピンクがかったいて、ポニーテール。家族構成は、両親が他界し今は、独り身。

大のお兄ちゃんっ子：如月由愛きづのゆあ

年齢14歳で、一茶の妹。小さい時、いじめられているところを一茶が助けてくれたことで、兄以上の思いを持っているが、肝心の一茶は、妹でしか見てもらえないので、なんとか振り向かせようと奮闘中。髪の色は、黄色がかっている。くせ毛で、先のほうが内側に巻いている。このことで、いじめられていたことがあるので、若干気になっている。この後の話で、由愛が一茶を追いかけて……！！？

柴の代わりの新任教師：神谷美香かみやみか

年齢24歳の新任教師。柴の代わり、とまではいかないが、有能。上から読んでも下から読んでも同じ名前なので、よくからかわれる。

恋に恋する『男』：鬼頭虎鉄きとうこてつ

年齢15歳、一茶のクラスメイト。大柄だが意外とシャイなところも。昔から大柄だったため、女子には怖がられていたため、女子に対しての免疫がない。だが、一度は恋をして、その子を守ってあ

げたいというロマン多き少年。髪は、黒のツンツン頭。家族構成は、両親のみ。

かなりのシスコン月島兄：月島仁 つきしまじん

年齢16歳の瀬名の実の兄。かなりのイケメンで、魔学の高等部では知る者はいない、というくらいの子から的人气ぶり。妹の瀬名と同じく、才色兼備、頭脳明晰、運動抜群の天才だが、妹瀬名にベタ惚れしている。髪は、薄い青で、肩まである。

キャラ設定紹介、今後のキャラ設定紹介（後書き）

第2章 新人戦編&隠し事編

よろしくお願いします。

もう、友達

晴れて、俺は新一年生となった。今は、どの高校、いやどの学校でも、長く退屈かつ、同じようなことをなんどもなんども繰り返すエライエライ校長様の話を、右から左へ受け流し、そして黒板の前にいる。いわゆる、転校の挨拶だ。

けれど、俺は今とても心配だ。ここで上手くやっていけるのか。そりゃね？誰だって転校は緊張するさ。アニメとかでよくあるだろ？転校生はともイケメンか、かわいい女の子で、入ってきたとそうそう、「きやあああ」やら「すっげーっ。かわいいー」なんて黄色い声援が飛んでくるやつ。けれど俺はどうだろう。耳を澄ますとアラ不思議。

「なあなあ、アイツだよな、編入そうそう、遠峯の胸を揉んだのって」

「どうしよう、強姦魔こうかんまだよー、私襲われちゃう」

すつつつつつつごく、イヤな噂流れてるんですけど！？だいたい、お前みたいなやつ、襲わんよ！この、自意識過剰女めっ！くっそう・・・なんとか自己紹介で、挽回しなくては――。

「えっと、今日転入した、如月一茶と言います。今後ともよろしくお願いします」

シーーン。

もう、いやっ！拍手は！？俺悲しいんだけど。

パチパチパチ

――！誰だっ！？

うつむいていた顔をあげると、そこには一人だけ拍手をしてくれた女の子がいて――。

月島さんっ！このクラスだったんだ、俺、救われたっ！！

「瀬名、あんな奴に、拍手なんかいいよー」

手の動きを遮るような形で、鈴が瀬名の手を押さえた。

・・・最悪だつ。なぜ、遠峯さんがここに居るっ！？

「はいはい。まあ、予想はしてたよ。・・・そら、あの右隅、一番後ろの席が、如月クンの席だ」

「あつ。はい・・・」

もちろん、担任は志士先生で、何故俺がこんなに軽蔑されているのかも分かっている。

無事席に着いた俺に話しかけてくる人間はいなかった。

「はあ・・・」

「どうしましたか？如月くん」

先生の話も終わり、今日はこれで下校となった。そこに、先生が退室そうそう、月島さんが、声をかけてくれた。

「ため息なんて、ついちゃダメですよ？一回で、1つ幸せが逃げていくって、言うじゃないですか」

「お、おお。ごめん。なんかさ、このクラスでやっていけるのかなつて」

「な、なんかヘビーな話、ですね？」

はい。すごくヘビーなんです。身も心も。

「瀬名あソイツなんてほつといて、行こ」

「あ、待つて下さい、鈴ちゃん。・・・一緒に、帰りませんか？如月くん」

「「は？」」

声が見事に重なった。まあ、普通だろう。なにせ、遠峯さんは俺を嫌っているのだから。それに、周りの生徒も「瀬名ちゃん」が、あの野蛮人を下校に誘ってる！」「きつと、これも瀬名様の優しさなんだよ」なんて聞こえる。

「な、なんで私がこんな人間以下の、動物と・・・こんな野蛮人と、ゲス野郎と、クズ野郎と、きも野郎と、・・・（以下省略）帰らなきゃいけないの！？」

すごい罵倒の嵐だな。見ろ、禁断の『以下省略』まで、出たぞ。

「鈴ちゃん、それはさすがにひどいよ？鈴ちゃんだって、分かっ

てるよね？如月くんが、悪気あってあんなことしたんじゃないって」

「う・・・で、でもっ。私の、胸を、触ったのは・・・」

「鈴ちゃん！」

「ううううううううう。わかったよう。でも、でもでもでもっ、その人間以下、私はあんたのことなんてこれっぽっちも許してないんだからねっ。瀬名に感謝しなさい！ついでに私にも！！」

「月島さんには感謝するけど、なぜお前にまで感謝しなきゃならないんだよっ！？」

「一緒に、帰ってあげるからに決まってるでしょ！？この優しさが、分らないの！？」

おお、俺は初めて知ったぞ。この程度が優しさっていうのか。

「そりゃ、ありがと」

「人間以下・・・あんたは私をバカにしてるの？」

「お前が、感謝しろって言うから、お礼を言っただけなんだけど」

「くうくうくうくう、屁理屈ばかりいってえ」

おお、悔しがってる。ちなみに、屁理屈ではないぞ？いちお正論だからな。

「はいはいっ。そこまで、ね？2人とも、早く帰ろう？かなり目立つちゃってるよ」

月島さんの言うとおり、野次馬がちらほらと見かけた。

「まったく、あんたのせいで目立つちゃったじゃない」

「・・・そりゃ、わるうございました」

「怒るよ？鈴ちゃん」

「んむう、分かったよ瀬名」

こうして俺たちは、さっさと野次馬が多くなる前に、帰路に就いた。

「さて、如月くん。あの、実はね、話が少しあって、だから帰り誘ったんだ」

話・・・？なんだろう。

「瀬名、こんな人間以下に優しさなんていないよ」

「ううん、違つ。その、お礼を言おうと思つて・・・」

「お礼??」

俺が、聞き返すと「うん」と顔を真つ赤にして、相槌をした。なんだろう、何かお礼を言われることなんて。

「あの、この前の事件のことなんだけど・・・」

ああ。アレか。

「助けに、来てくれた・・・よね?嬉しかった」

「い、いやいや。元はと言えば俺が悪いんだし、それに、普通は俺が謝るところだよ」

真剣の話だと察したのか、遠峯は静かだった。

「ううん。本当はね、誰も助けに来ないって思つてた。だから、ドアを思いつき蹴つて、来てくれた時・・・その、え、っと、すすごく、——から」

「え?ごめん、その聞こえなかったからもう一度言つ——」

ガンツと頭を思いつき殴られた。遠峯さんに。なぜ?

「あんた、人間以下の以下かもね!! 空気読みなさいっ、今聞き返す場面じゃないでしょうが!!」

月島さんを見ると、真つ赤に顔を染めたまま、コクコクとうなずいていた。

「・・・そ、そうなのか、それは失礼した、月島さん」

それから、何秒いや、何分かくらいに経つたあと、月島さんは、口を開いた。

「あ、あの、お願いがあるんですが、いいですか?」

「あ、はい。俺ができる範囲でお願いしますね?」

「その・・・月島さんつて言うのはやめてもらえませんか?」

「え?」

なにか気に入らなかつたんだろうか。もしかして、過去に何かがあつて、月島という名字が嫌いだったりして!? なんて、事はあるわけないか。

「その、名前で、呼んでください」

「名前で？いいですけど、月島さんはそれでいいんですか？」

「（コクコク）」

「え〜と、瀬名、さん？」

「あっ！その、呼び捨てでいいです。仲のいい友達はそのように呼んでいるので」

仲のいい友達って・・・遠峯さんのことだよな。

「分かりました、じゃあ。瀬名？」

「は、はひっ」

こ、声が裏返ってるよ。

「んじゃ、今度は、こっちから、俺のことも名前でいいよ」

「ふえ！？い、いいんですか！？」

「う、うん。いいけど・・・」

何をこの子はこんなに、真っ赤になってるんだろう。

「えっと・・・一茶、くん」

「呼び捨てでも・・・」

「（ブンブンブン）」

首をかなりの速さで、横に振った。

此処まで、否定されると、罵倒以上に傷つくな。

「んじゃあ、俺は此処で」

歩きながら、話していたため、分かれ道まですぐだった。女子寮と、男子寮は分かれているから、此処でお別れだ。

「う、うん。またね。・・・一茶くん」

「おうっ。またな、瀬名」

「ひうつ」

変な声が聞こえたけど気のせいだろう。

「私は、さよならなんて、言わないんだからね！」

「はいはい。お前も、また明日」

こうして、男子寮への道を歩いて行った。

「なんだかんだ言っても、あの二人がいれば、生活していけそう
な、そんな気がするよ」

心の底から、そう思った。俺たちはもう、友達なんだろうって・

頭に騒音ノイズが走る。

「——ッ！」

一瞬、ほんの一瞬だ。頭に痛みが走った。と、同時に——。

目の前には、少女がいた。けれど、やがて少女は息絶えてしまった。

『僕はもう——』

「ッ……。なんだよ、今の？」

くそつ。せつかくいい気分だったのに……。なにが『僕はもう

——』

「『友達なんて、いらない』何だよ」

こういうときは、さっさと寝るに限るな！

一茶は、このことを、朝になったら忘れていた——。

厄日来襲

晴れて、新高校一年生となった俺ですが、何やら、ものすごい悪いレッテルを貼られています。これから先、大丈夫なんだろうか・・。

「・・・はあ。気が進まない」

まあ、胸を触ったことは確かに、悪いのかもしれないけど、事故だぜ？事故。それに、あるかないかも分からない胸を触っただけなんだけどな。

気が進まないの、下を向いたまま歩いていたら、いきなり頭に軽い衝撃が走った。

ドンッ――

「あ、すまん」

前に居た人に気づかずぶつかってしまった。

「ん〜？」

すごく、図太い声だな。

高校生というより、どつかのおっさんみたいな声が上からした。

「（うおっ）」

つと、あぶねえ、驚きが声に出そうになった。

前に居たのは、声の通り、図体がかなりでかい男だった。

「ああ、お前か。確か、俺らのクラスに転校してきた、強姦魔」

「強姦魔じゃねえよっ！」

怒鳴っちゃったけど、いいよな？こんなおっさんみたいな奴に怒鳴ったけど、俺悪くないもんな。

「あゝわりい、わりい」

お、その図体でこんなにあっさり退くなんて、案外良いやつかも。

「なあ、お前え。俺が誰だかわかってんのか？」

「はい？」

うゝん。見たことあるよな？同じクラスだって言ってたわけだし。

「悪いな。知らん！」

「俺の名前は、鬼頭虎鉄っつゝもんなんだけどよ」

「ほう。俺、如月一茶な？よろしく」

「その、何だ。お前に教えてほしいもんがあるんだ」

「教えてほしいもの？何を？」

虎鉄と名乗った男は、顔を赤らめ、すこし俯いたまま、小さな声でしゃべった。

「女の子と、話せる方法。教えてくんね〜かな？」

「は？」

「・・・なに、こいつ。バカなのか、いつちやつてる人なのか？？」

「話せねえ〜んだよ。・・・だから、強姦魔のお前なら、簡単に女に手を出せるお前なら、教えるのも簡単だろ？」

若干イラッとするのは、俺だけ？俺だけかな？？

「つてか、普通に話せるだろ」

「い、意識しちまうんだよ。童貞だし・・・」

「ど、童貞つて・・・、こんなとこで何言つてんだよ！？くそヘタレ野郎！」

「お前、もう童貞じゃないんだろ？もう非童貞なんだろ！？なら、俺に——」

「うつせ〜よ！さっきから、童貞童貞、うつせえんだよ！だいた、俺だつて、そのまだ・・・」

「・・・。気にするな」

「は？」

「俺だつて、童貞だ」

「・・・すつごくうざいし。下ネタばっかだし。」

「お前、そんなんだから、話せねえんだよ。きつと・・・」

時計を見ると、遅刻ギリギリだったため。走って、学校まで行った。

「ん、今日は、高校始まって二日目だが、何やるか、知ってるな？」

黒板の前に立っている、志士先生が、質問をした。もちろん、俺は知っている。

たしか・・・、新人戦だったけな。

「ふむ。お前らの顔を見ると、だいたいは知っている顔をしているな。まあ、お前らも知っている通り、新人戦だ。春になれば、必ずやる大会だ。春夏秋冬、1つ1つの季節の初めに予定をしているんだが・・・。まあ、少しだけ規制がかかってな」

ん？規制？？さすがに知らないな。

「今回は、クラス代表選となった」

ここで、一人の生徒が手をあげる。たしか、山本君だったな・・・。

「センサー。それは、今までと何が違うんですか？」

「今から話す。まず、今までは、一学年全員で、トーナメントだったが、人数が多すぎてな。今回は、一クラス、女子が一名、男子が一名の2人が、クラスの代表となって、トーナメントで戦ってもらうことにした」

つまり、各クラスで、強いやつを選んで、トーナメントってやつか。まあ、俺には無縁の話だし、スルーしておくか。

「女子は、遠峯鈴。男子は――」

次の瞬間俺は、この世の終わりを聞いた、気がした。

「如月一茶だ」

へえ、如月一茶。珍しいもんだな。一クラスに、同姓同名のやつがいるなんて。あれか？ドッペルゲンガーってやつか？？

「キミだよ？如月クン？？」

先生の指した指の先を追っていくと・・・。

「お、れ？」

「そ。キミ」

先生、あなたは知ってますよね？俺がどんな人間か。・・・ああ、俺は今、気付いた。

アイツ、遊んでやがる――。

厄日来襲（後書き）

短くて、すみません。

志士との初訓練

『拳法』それは、日本古来から続く、歴史ある武術だ。よく映画化されたり、アニメにされたりしている『少林寺拳法』もその一つだ。

さて、何故俺がこのような、役に立たない話をしたかというところ・「キミ一ヶ月後にある新人戦、頑張ってもらうためにも、当て身覚えてもらうね」という、志士先生からの優しい優しいお言葉からだ。独学では限界があるということで、先生に、実戦訓練を強制的にやることになった。

ペアと共に、闘う、というのが原則らしいので、鈴に迷惑をかけれない。しぶしぶ、俺は承諾したのだ。

「やほやほ、逃げずに来たんだね、如月くん」

ふむ……。優雅に、ドアを開けて来る姿は神秘的だった。此处は、実戦専用のルームらしく、ガラスのような透明の板で囲まれた部屋に、夕陽の光をバックに、そしてガラスのような板の反射で眩しく輝いてツカツカと歩いてきた。——そう、夕陽をバックに。つまり、俺は此处に昼近くから居たということ……。

「すつげえ遅れてんじゃねえかっ!？」

「んゝ。めんごめんご。悪気あったわけじゃ〜ないんだよ?」

全く反省の色がない先生に少し、がっかりしてしまう。

「はあゝ、勘弁して下さいよ。俺にだって、用事くらいありますし」

「…………汚名返上?」

「…………そうですよ…………」

畜生。しょうがないだろ? まだ入学して間もないのに、あだ名が『強姦魔』ってどうよ? なけるっしょ。

「まあ、遠峯ちゃんの胸触ったんだし、それくらいはしょうがないでしょ?」

まあ、そうなのだが。

俺は、あえて、返事を返さず、事を進めた。

「んで、俺を呼んだのは、拳法を教えるためなんでしょ？さつさと、終わらせて帰りたいんですけど」

「ん。そうだった。いや、さすがにね、魔法使えない人間が、魔法使える人間に、勝てるなんてはなから思ってないしさ」

「・・・んじゃあ、なんで此処に呼んだんですか」

「キミには、当て身の、『殴虎』と『突拳』の二つを覚えてもらうんだよ」

「オウコ・・・トツケン??」

聞いたことがない名前だな・・・。

「うん。この二つは、すごい力を持つてるんだよ」

「おおっ!」

オラ、ワクワクしてきたっぞ。

「それは——」

「それは——?」

ゴクツと唾を飲む。

なんか、俺、強くなるんじゃないかね?という淡い期待を抱きながら、次の言葉を待った。

「——相手を、気絶させる!!」

「・・・」

え・・・?アイテヲ、キゼツ?

「つまり、相手を、気絶、つまり戦闘不能にしちゃえば、いいってことよ!!我ながら、あつたまイーー!!」

「・・・つまり、逃げると?」

「そっ」

「勝てないから」

「うん」

ふっ・・・舐められたもんだぜ。不肖、如月一茶は、そんなチャチなものでは闘わねえ。

「あ、いちお、防具とかないから。キミも知ってるよね？『能力者は、魔力の残量が多い場合、他からの魔法の攻撃を僅かながら弱めるため、常時無意識的に、魔法で体を覆っている』ってこと」
忘れるわけがない。教科書をバンバンみたからなっ！けど・・・、俺なんか無理に思えてきた。

「だーから、いつてるじゃないの？気絶方法は教えてあげるって」
グウの音も出ないとはこのことだろう。選ばれたんだから、恥をかかない程度に頑張ろうと思っていたけれど、鼻先から折られては、悔しいというより、なんだか虚しい・・・。

「・・・分かりました」

「いい返事を聞けてよかったよ」

これから、放課後&休日には俺の休みは無いということを確信した。

「まずは、基本動作からね？」

動きやすい服に着替えてから数分。さっそく、トレーニングが始まっていた。

「相手を、気絶させるためには、大切なことが1つ。それは、躊躇^{うちよ}しないことです」

グツツと、目の前に居る先生が、手に力を入れた。

「言葉でいつても、分かんないね？体で、感じ取ってもらおうよ」

「はいっ！・・・って体??」

フツと目の前から先生が消え――。

「相手の経絡^{けいろく}へ、正確な一撃を・・・」

ぼそつと呟いた、先生はいつの間にか後ろにいて・・・。

ドガッ――

「――カフッ!??」

いきなり目の前がチカチカしてきた。

ああ、体で感じるって・・・このことね。

力が入らなくなった体は地面にドシャツつと倒れた。

「・・・やっぱ、普通の人間だよね」。反応速度は、人間よりも尋常なくらい、かけ離れてたけど・・・」

これから、大変だなと思った志士だった。

「ん・・・」

視界が明るくなる。まだぼやけてはいるが、ハッキリと意識が戻ってくるのが分かる。

（ああ・・・そうだ。俺、志士先生に殴られて、気を失って・・・

）
「つて、何してくれとんじゃボケえええ！」

まだ若干ぼやけている景色だが、今は関係なかった。

「おつ。お早いお起きで」

のんきな返事が、頭の上から降ってきた。

「あんた、何してくれとんの！？痛いでしょ！つてか、俺を気絶させてどーすんのさっ！？」

少し考える動作をした後、ハッキリと言い放った。

「いや・・・。一度やってみたくて。えへへ」

（・・・）

「えへへ・・・じゃねえよっ！！あんた、自分の興味本位で、生徒を気絶させちゃうわけ！？」

「んもーうるさいな！いいじゃない。DVDレンタルで見えしっ
かり練習したんだから」

「DVD！？え！？ちよつと気になる！！」

「TATUYAのおすすめコーナーにあつてからね」

「・・・その店、ある意味、店の片端から隅まで、18禁でしょ」

（はあ・・・こんなので強くなるのだろうか）

俺は、徐々に志士先生を信用できなくなっていた。

「よし・・・そろそろ、やりますか。まじめに」

「初めからそれなら、いいんですけどね」

鈴に迷惑をかけない程度には強くなりたい。そんなことを、考えて俺は腰を上げた。

「んじゃ、まずは、殴虎おうちからね」

「はい。って言うか、オウコって何ですか？俺の知る限り、武術の技には無いんですけど・・・」

（いちお、帝学の際は、運動得意で、いろんなスポーツに手を出してたから、武術もなんとなくわかるけど・・・）

一茶の知る武術には、その単語は無かった。

「殴虎・・・殴るの『殴』、虎とらの『虎』って言う感じで書くんだけどね。読んで字のごとく、虎の用に俊敏な殴り。それが殴虎、正確に決まれば、気絶とまではいなくても、相手にかなりのダメージを与えることができる」

「つまり・・・よくドラマである、相手の腹部に一撃を与えて気絶させる、みたいな感じですか？」

「んゝ感覚的にはそうかな・・・」

（うん。いちお、想像は出来た・・・）

よくテレビドラマであるワンシーンを思い出していた。

「でも、あんなに簡単に、決まらないよ。だいたい、気絶させるなんて、普通は、首元にある頸椎けいついをかなりの大きさの刺激じゃないとダメだし・・・。この技は、無理やり腹の近くにある頸椎に直接つながる神経を刺激して、気絶させる手なんだ」

「なるほど・・・けど、それなら首の頸椎に直接当てたほうが、効率がいいのでは？」

「キミは、魔法を使う相手に、生身の人間が後ろを取れると思う??？」

（そうか・・・相手は、腐っても魔法使い何だった）

「無理・・・ですね」

素直に諦めた。

「よし、んじゃさっそく、教えるけど、一週間でものにする感じで行くよ」

「了解。さっさと始めようぜ」

「んじゃ、このデータと戦ってもらおう」

そう言つて、志士先生は、部屋の右端にあつた機械をいじつた。
ブウウウン――

起動音がして、目の前に、俺と同じ年のような体系をした、人間が現れた。

「これは・・・？」

「それは、キミの運動能力に合わせた訓練用データだよ。此处はデータを解析、分析、そして実体化を出来る、国唯一の高性能訓練ルームなんだよ。キミの力を徐々に上がって行かせるには丁度いいかなつて」

「これは・・・データなんですよ？触れるんですか？」

「触れるし、そいつから攻撃を受ければ、ちゃんと痛い。それとこれにはレベルがあつて、キミは初め1からね？目標は、10つてところ」

「・・・」

（なるほど・・・こいつは、データで作られた、ロボットつて訳か）

「そうね。まず――」

「大丈夫ですよ」

「？」

「さつき、俺を“殴つた”技が、殴虎何でしょう？」

「そうだけど・・・」

「なら、完全に記憶インプットしてます。動きも、力の加減も・・・」

そういつて、一茶は、地面を強く蹴つて、相手の腹部めがけて、思いつきり拳をぶつけた。ドラマの用にすぐ横に顔が見える、なんてことは出来ないけど、伸ばした手がしっかりと、相手の腹部に当たっていた。

ドサツ――

データが倒れる、と、同時にそれは消滅した。

「・・・。これは、予想外かな」

志士先生は、思わず、というような表情でつぶやいた。

「次、まだですか？」

「う、うん。分かった。じゃあレベル2――」

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

目がチカチカする。貧血のような感じだった。

「すっごいね。今日でレベル3まで行くなんて」

「・・・。レベル1とレベル2の違いが、大きすぎる。それ、壊れてるでしょ・・・」

レベル2も楽勝と意気込んだ矢先、レベル2に負けた。

（いや、だって、完全にバグでしょ。壁がアイツのパンチでみしみしいってんだよ？怖いってもんじゃないよ！しかも、男で、疲れるって機能も付いてるもんだから、『ハアハア』って言いながら襲ってくるし。完全に危ない人を読み取ってるっつゝの）

そんなことを考えながら、レベル3を倒せた自分に、少し自信が付いていた。

「キミは、意外と瞬発力と反応速度が高いからね。相手の攻撃をよけながらって言うのもありかもね」

「はあはあ・・・そうですね」

明日は学校だ。いまだき珍しい、日曜登校だ。午前中で終わらしく、話だと、放課後に大会の練習をする人が居るらしい。

（その時、鈴と合わせればいいか・・・）

「んじゃ、今日は終わりね？私先に行くけど、キミ・・・どうする？もう少しやってく？」

「いえ・・・休ませてもらいます・・・」

想像以上に、きつかったことと、明日のために回復させるためということで、素直に帰ることにした。

「はいよーんじゃ、また明日。っと、言い忘れてたけど・・・」

「？」

「この練習は秘密ってことで」

「分かりました・・・」

どうでもいいことなので、軽くあしらったあと、シャワーを浴びて、帰路に就いた。

「星が、きれいだな・・・」

外に出ると、いつの間にか夜になっていた。頭上には、とてもきれいに瞬く星が、いくつもあった。

（たまには、こういうのも、いいかもな・・・）

そう思い、心から落ち着いた――。

隠し事

突然だが、朝って憂鬱ですよ？これから一日が始まるのかつて感じで。とくに休み明けとか、憂鬱すぎて死にそうですよね？学校に行ったり、会社に行ったり、はたまたハローワークに行ったり・・うん、最後のは失礼極まり無いですね。ごめんなさい。

さて、まあ俺は朝は苦手ではないんです、無いんですけど今現在の状況はとても苦手です。

右には、クラスかつ学園のアイドル『月島瀬名』その右には局地的に人気の『遠峯鈴』なんともまあ、リア充の基本ですよ？周りの反応は、男子が『うわぁ』なんてなつてくれれば、最高なんです、けどね、俺は今、とてつもなく憂鬱です。朝から、憂鬱なんです、みなさんみたいに。だってですよ、周りの声が、すごく痛いんですもん。『きつと、あの強姦魔に弱みを握られているんだ、瀬名様は・・』『鈴様がなぶってけなして頂けるのは私だけですっ』なんて聞こえるんだもん。なに『様』付けって！？護衛かなにかなのか！？最後の言葉なんて、もう変態っ！

(・・・一刻も早く、教室に行きたい。そして現実逃避をしたい)

「——君、一茶君っ！」

「・・・ん？」

いつの間にか、呼ばれてたみたいだ。

「もう、朝からばーっとしちゃって・・大丈夫？？」

瀬名から心配を受けるほど考えちゃってたのか・・。

「うん、大丈夫。ありがと、心配してくれて」

笑顔で、瀬名にお礼を言った。

「——っ。う、うううん。こ、この前のことも、あったから、その・・。」

「ははっ。心配性だな、瀬名は」

「そうよっ。瀬名っ、こんな奴に、心配なんていらないよ！」

横から、野次を飛ばしたのは、遠峯鈴だ。

「まだ、許してくれないのか、鈴？」

「許すも何も・・・ってか、なんであたしを名前で呼んでんのよ！？」

「ダメだったか？」

（『瀬名』って呼んでるんだから、『鈴』のこともいいかなと思っただけど・・・）

「ダメって言うか、あたしは、許可してないわよっ」

「許可、必要なのか！？」

「当り前よっ」

「てつきり、友達だからいいのかと」

難しいな、と付け加えた。

「友達って・・・あたしが、いつ、どこで、誰と友達になったて言うのっ！？」

「いや、勝手な憶測でした・・・でも、俺は友達と思ってるからな？」

「~~~~っ。勝手にしなさいっ」

「ははっ、ありがと」

こうして、ちよくちよく話して学校についた――。

一時間目は数学、二時間目は外国語、三、四時間目は魔法、となつて――魔法っ！？

いや、まて・・・魔法なんて教科あるのか？あるんだから、日程表にあるんだろうけど、俺、魔法使えないんですけどー！。

（どうすんのさ！？転校三日目で、『魔法が使えない』なんてばらすのか！？無理だ、強姦魔という異名の上に非魔法使いだなんて知られたら俺は終わりだ――）

「やつほ、如月クン、今日も元気かい？」

不意に声をかけられる。

「ああ〜この感じは、志士先生ですか、昨日はありがとでした」
「いやあ〜いいいいよ。それより、今日はなんかやばいんじゃない??」

なにか知ったような口で聞いてきた。

（ああ〜この人、知ってるんだな・・・）

「・・・魔法の、教科ですよ？どうするんですか」
はあ〜とため息が出た。

「んふふ。そんなんだよね〜。厳しいんだよね〜？」

ニタアと不気味な笑みを浮かべた。

（うわ〜。瀬名と鈴に教室に先に行くように言っておいてよかった〜。たぶんコレ見たらあの二人子に人を幻滅するんじゃないかな？）

「んでさ〜協力——」

「——なにが目的ですか？」

「はやっ！せめて、言わせて言わせてよっ!？」

「なにが目的ですか？」

「・・・RPGの武具屋はやめて？」

「・・・」

「なにか言って!？お願いっ!」

「ええいつ。あんたが何かお願いするときは、大抵目的があるって相場が決まってるんですよ!？かつあげですか!？それとも、学食の人気メニューをまとめ買いですか!？」

「とくにないつて。キミの存在がばれると、私の立場が危ういかな。それに給料が減るし・・・」

「さらつと、本音出ましたよ？」

「・・・。まあ、キミをこの大会にエントリーしたのは私の独自の判断だからな。それに免じて——」

「免じてって、普通悪さをされた側が使っ言葉ですよ？」

「・・・。んもう、いいっ！静かに聞いてなさい!〜んで、とに

かく私がサポートするから。それに、魔法の授業は私が請け負っているからな」

「任せますよ……」

「それと、瀬名と、鈴にはあのこと、教えるよ？」

「……。瀬名は分かりますが何故鈴にも？」

「当り前でしょう、大会のペア何だから」

考えてみれば簡単なことだった。

「分かりました……」

「ん、あと数日で、殴虎と突拳を覚えないとね？」

「そうですね……」

この会話の後、瀬名と鈴は呼びだされ、俺のことを知らされた。

鈴はそのあと、ちよつと整理するといって、どこかに行ってしまう、今は俺と瀬名だけが、教室の外にいた。

「あはは……一茶君にそんなことがあつたとはね」

「ごめん、隠してたってわけじゃないんだけど……この場合は隠してたって表現のほうがあつてるか……」

「ううん。私は良いけど……。鈴ちゃん、大丈夫かな」

「……？どうして??」

なぜか暗い顔をする瀬名を一茶は理解できなかった。

「実はね……。鈴ちゃんの家系ってすごく有名の家系なの」

「有名??」

（初耳だな……）

「うん。遠峯家、それは先祖代々から伝わってきたとされている名高い家系何だけど。その家柄のせいで大会では、一、二回戦の負けは絶対に認められないの……」

（なるほど……ってマジで？んじゃあ、俺ってすごく邪魔じゃん）

「それに、鈴ちゃんは、遠峯家代々の中で、もつとも魔力が——」

次の言葉で、俺はこの大会に出るべきか出ないべきかの天秤が大

きく傾いた。

「——少ないの」

鈴は、遠峯家始まって以来の才能のない人間だといわれていたらしい。瀬名の情報だが、鈴には5歳年上の兄『遠峯 朱雀^{すざく}』が居て、彼は遠峯家始まって以来の逸材と言われていたらしい。

幼いころ、鈴は私の力を奪っていったと泣いていたらしいが、時進むうちに兄のことを慕うようになっていた。そのころにあったのが瀬名だったという。当時はなにかしゃべる時には『兄さんはね——』がついていた。そんなある日、一度も負けたことがなかった、兄朱雀が、学園への依頼をチームで片づけに行ったその日、消息を絶った。朱雀以外のチームメンバーは無残に殺されていたが、肝心の朱雀が出てこないということで、朱雀は裏切りとして学園にさらされた。

翌日からだという、鈴の性格が変わったのは。

笑顔を絶やさなく、素直で兄思いの鈴は、笑顔をほとんど見せず、兄のことを一切話さなくなった。

此処までが、瀬名の知っている範囲だと言っていた。

俺は、なにか出来るのだろうか……。俺は鈴を助けることが出来るのだろうか……。

たぶん鈴はまだ暗闇の中に居るのだろう。慕う兄の行方不明、そして裏切り者の扱いを受けた兄、彼女はきつとどこかでまだ、兄のことを思っているのだと感じた。

そして、俺の答えはもう、決まっていた。

戦いに勝ってアイツの、遠峯鈴の笑顔をもう一度咲かせる、と。

決意

俺如月一茶は、勝手に編入させられるは、不意に胸を触って強姦魔扱いされるわけでいろんな意味で大変な日々を送っているが今現在の状況は、これまでに以上に大変だ。

何としても勝たなければならぬ、遠峯鈴。彼女は何故勝たなければならぬのか、と言うと不在の天才兄、遠峯朱雀の顔を汚さないためだ。また、自分の存在を認めてもらうことだ。

そんな女の子と、新人戦、いわゆるデビュー戦だ。そのパートナーになっちゃった、正確には仕組まれているんだが。

負けは許されない子と、俺魔法が使えない男、そんなので勝てるのか否や……。

とにかく、何もしなければ始まらない！という訳で、屋上で静かにたたずんでいた鈴に「力になれるか分からないけど、俺に何かできることがあれば、なんでもするから」ベタだろうが、なんでもよかった。ただひたすらに思っていることを口に出したらこんな感じになった。だが彼女の返答は「そう……。聞いたのね？」そして――。

「――同情はいいわ」

と、冷たく言い放った。

「同情なんかじゃ――」

誤解だと言いつ終える前に鈴は俺の目の前から消えた。

「……確かに、同情……なのかもな」

はあ、とため息をつき、その場を去った。

この時、屋上に黒い影があるのを俺は気づくことが出来なかった。

1、2時限の授業はすごく楽だった。たぶん寝てても、分かるん

じゃね？という感じだった。

（なにせ、東大くらいのレベルはもう中学で終えたしな・・・）
冥学に居たころの自分を思い出していた。

あの頃は、何もかもが輝いていた気がする・・・言い過ぎか？

まあなんにせよ、此処よりも居心地は悪くなかっただろう。

「・・・どうすんだよ。ほんとに」

今から3、4時限目の『魔法』の教科だ。

忘れないでほしい、俺は魔法が使えないことを。俺は魔法が使えないことを！！

大切なので、2回言いました、はい。

「本当に、どうするんだろうね？一茶君」

近くに寄ってきた瀬名が深刻そうに言う。

あ、そうだった、教えたんだっけ・・・。

「あんたなんて、此処の学園から追放されちゃえばいいのよ。この変態」

鈴は、いつも通りだ。けど、なんとなく思ってしまう、カラ元気じゃないのか？と。

そのこと言うと、鈴はきつと怒るだろう、「あんたバカじゃないの！？あんたの目は節穴なの！？」なんて言われそうだな、なにせ鈴は、感情を素直に表に出すことが苦手なのだから。

永い間付き合っている訳ではないのだがなんとなくわかる。

「さて、まあ志士先生がなんとかしてくれるって言っし。なんとかするだろうっ」

ネガティブはダメだ。

気合いを入れなおして一茶は、元気よく立ちあがった。

「——はい。今日は、今以上に魔法を強くすることがメインです。何をやるかは個人で分かっていると思うから、各自で練習。また分からないことがあったならば、私の所に来なさい。——以上っ！」

そういつて、志士が話を切り上げると、各自バラバラに散らばった。

魔法の授業は、学年全体でやるらしいので、今現在ある1〜8組の全員が動く。数が多いと思うが、1クラス約20人なので普通の学校とさほど変わらない。また、外で練習するのが基本なのだが、服装は体操服みたいなものではなく、動きやすそうな、またSFがあった服を着ている。そもそも、この学校は体育の代わりに魔法があるらしく、女子の体操服姿が見れないのが難点だ・・・ンッ。

俺は何を考えているんだ・・・。

まあ、冥学では、絶滅危惧種であるブルマだったので少し物足りないというか・・・ンッ。

さて、俺はなにをしてこの2時間を過ごそうか迷っていた。

瀬名と鈴に聞くと、いつもは先生が教えてくれる、らしいのできつとこの自主練は俺のためだろう。

「殴虎の練習・・・かな」

そう思つて、俺は構えた。

けれど、構えた先は何もなかった。なぜなら目の前に、鈴が立っているからだ。

「ほ、ほら、行くわよ。練習に」

「・・・は？」

意味が分からないのだが・・・。

「だ、だから、パートナー何だから、合わせないと！息を！！」
なるほど・・・。

鈴は、顔を赤く染めながら手を差し出した。

「早くしなさいよねっ！」

「・・・手？」

「ここらは、結構入り組んでるの！も、もし初日に変態とあたしが消えたら、なにかやましい関係があるかと疑われるじゃない！！」
はぐれないようにつてことか・・・、こういうところが、素直じゃないんだよな。

「茶は手を握り、走った。」

「はぁ・・・はぁ・・・」

「こんなん、息切れしてるの？変態でひ弱なのね」

「つく。しゃ、しゃーないでしょ。はぁ・・・。毎日訓練してる、鈴たちとは違うんだよ」

「っそ。まったく、こんなんがパートナーってあきれるわ」

むぐぐ・・・。悔しい、悔しいけど、間違いない！

「そ、それより、此処どこなんだよ？」

走りに夢中になっていたから場所を把握していなかった。

「ああ、此処？校舎裏。あたしと瀬名のお気に入り場所」

「お気に入り場所なんか俺を、呼んじゃっていいわけ？」

「あ、あたしと、瀬名と、変態って一緒によくいるじゃない？な、仲間はずれにしていたなんてクラスに知られたら嫌じゃない。べ、別に、ただ一緒にいるから、それだけ、それだけなんだからっ」

・・・。仲間、ってことは否定しないんだな。

「そ、それよりもっ」

今度は、鈴が先に口を開いた。

「あんた、『魔具』持ってるの？」

「・・・魔具？」

「そ、・・・知らない、もしかして？」

「あ、ああ」

たしか教科書にも載って無かったような気が・・・。

「あんた、本当に初心者なのね。あきれるを通り過ぎて、逆に尊敬するわ」

「そりゃ、ありがと」

「あんた・・・ほんと喧嘩売ってる？」

いま、尊敬するって言ったじゃん！？

「ま、いいわ。魔具って言うのは、その人の扱う武器のことよ」

「剣・・・とか？」

「そ。剣、杖、珍しいものだと、銃なんてのもあるわね」

俺が、この前編入当初もらった剣はあれ魔具なのか？斬れなかったんだよな……。

「ない、な。それより、魔具があると、何かいいことでもあのか？」

「大ありよ。魔具って言うのはね、その人の魔力を使って、パワーが上がるのよ。例えば剣で言うとか、切れ味が上がるみたいだね」
「なるほど……な。けど、瀬名は、魔具使ってないよな？」

「魔具は全員が全員ほしいって訳じゃない。瀬名なんてとくにそうよ。瀬名は水系魔法が得意だから、剣なんていらないし。詠唱だつて覚えてるから杖だつて不要だし」

「……んじゃ、鈴は？」

「ん。私は、『魔法陣模写』^{カード}よ」
「カード？ぴらぴらの??」

すぐ思いついたのは、紙のような感じだった。

「ぴらぴらじゃないけど、あんたが予想してるのとだいたい同じよ」

そう言つて、鈴は懐から紙みたいなものを取り出した。

「コレがそれよ」

量は、少なく15枚くらいだ。その中から1枚とりだして、裏面から表面に向けた。

——パラッ

おなじみの音が鳴る。

「……？これは、魔法陣??」

そこには、一面にこの前、柴や瀬名の戦っていた時のような魔法陣らしきものが描かれていた。

「そうよ。魔法陣。これの本当の名前は『魔法陣模写式呪札』^{まほうじんもしやしきじゅふだ}っていうの」

なんだか、すごい名前だな……。

「まあ、魔法陣を模写した呪札ってことよ」

「なるほど……」

「これは、このカードに微量の魔力を流し込めば、そこに描かれている魔法陣が展開して魔法が発動する仕組みなの。あんたも知ってるんでしょ？私が魔力が少ないってこと」

「あ、ああ、けどそれがあれば問題なくね？」

「それが、このカードは、微量の魔力で展開する代わり、強い魔法は此処に描かれていないの。正確には描けないんだけどね・・・」

「・・・。つまり、基本の魔法だけ、と？」

「そうよ。それにいくら微量と言ってもあたしの魔力絶対値は60だからね。すぐ尽きるよ」

60・・・。たしか入学には50が最低だった。なら本当に鈴は少ないんだな・・・。

「いや・・・。そこは、俺がカバーするさ」

「出来るもんならね。まあ期待はしないよ」

「いや、出来る。俺約束したしな、なんでもするってな」

真剣な表情で、一茶は鈴を見た。

「・・・。変なところで・・・カツコイイんだから」

風が突然舞った。

「・・・？なにか言った？？」

後半が聞こえなかったけど、なにか大切なことだろうか？

「な、なんでもないわよっ変態！」

こうして、俺は鈴の力になることを決意した。

誤解

俺は、鈴の力になる。そう決意した、のは良かった。

俺と鈴が話し合い、また練習する場所は校舎裏だった。鈴は考えが浅はかなんだろう、俺はすぐく思う。先ほどの会話で、俺が迷子になり、そして鈴がそれを探すことで、俺達2人が居なくなり「ただならぬ関係なのでは？」などと疑われるのが嫌だ。と言っていたのだが・・・この状況は、それと変わりないですか？なにせ、校舎裏に俺達“2人”何だから。つまり、みんなが練習しているところには必然的に俺と鈴のみが居なくて・・・。

さて・・・どうしようか。正直まずい、とてつもなくまずい。みかんにのりを巻いて、醤油につけたくらいまずい。よくイクラの味になるゝなんて聞くが、俺はそうは感じない。なんともいえない味、あえて言うならば、まずい、だろう。

話を元に戻そう。

この状況をどう逃げよう。鈴に話したところ「あ、あんたが悪いんでしょ！」理不尽な！？俺？俺が悪いのか！？・・・まあ、このさいどうでもいい。今はどうするか、だ。

とつくに、3、4時限は終わっている。まあ、かなり練習したのだが。

日曜登校は、午前だけ。つまりこのまま待っていれば？と提案したところ、なんと此処の学校、出席人数がすべて揃うまで終わらないらしいのだ。潔く、帰るのも手だが・・・。

「帰るか・・・？」

簡単に提案。まあ、このさい仕方がないだろう。鈴も分かってくれるよな？

訴える目で鈴を見つめた。

「・・・なにジロジロ見てんの？変態」

「・・・。お前なあ、もういいだろう？その変態をなんとかして

くれよ。それに早く帰らんともつと状況がまずくなるだろ!？」

少し強めに言うと、鈴はあっさり承諾した。

「分かったわ……」

「そ、そうか……」

「ただし、変態は変えないわ」

「はいはい……。もういいっての」

こうして、俺達とはとほと、教室に歩いて行つた。

まあ、遠くはないのですぐつくだが、その間の沈黙は俺にとつて苦手だつた。

「な、なあ、胸を触つたのは謝る、だから許してくれ」

「……とづくに許してるんだけど」

声が小さく上手く聞き取れなかった。

けど、俺は次の言葉を誤つた。

「なに……。鈴の胸なんて、そこらの男とさほど変わらなかったしな」

ぼそつと、まるでモスキート音くらいの小ささでつぶやいたはずだつたのに……。

「……な、なななっなんですってえ……!？」

聞こえていた。

「ナ、ナンデモナイデス」

おお……。緊張すると、カタ言になるって本当なんだな。

「最低っ!!! 変態っカスっ、宇宙のゴミっ!!!」

鈴を見ると、半泣きだつた。

そこまで傷つくとは……。予想外だつた。

「バカ、あんたなんて、知らないっ!!!」

そう言い残し、見えかけている俺たちのクラスに、“半泣き”の状態で駆け込んだ……。

「……『半泣き』？」

あれ、いやな予感びんびんなんですけど？

放課後、二人きり、校舎裏、そして半泣き……。見事にフラグ

じゃね？『強姦魔』の……。

ガラ——

目の教室のドアが突然開いた。と同時に、女子が、そしてうざそうな男子が出てきた。

「如月いゝ。鈴様になにをしてくれてんの？ええ！？」

たしかあれは……、うんこの前少し話した、童貞の鬼頭虎鉄君、だったよな？

「さて、今日は、ジャソプの発売日だし、買いに行くかな……」
俺は身体を反転し、帰ろうとした、が——

——ガシッ

肩を思いつきり掴まれた。

ギリギリと力が入ってくる。

「HRホームルームが、残ってんぜ？如月い」

「あ、あはは……。そ、そうですね」

ああ……。俺って、死にかけること、多いな。

学校に悲痛の叫びが聞こえたのは、数分後だった。

誤解（後書き）

短くて、すみません

もう一つの隠し事

俺、如月一茶はただ今強姦魔の称号を掲げています。

鈴の胸を触り、そして泣かせた。これは確かに、強姦魔になつても仕方がないだろう……。そろそろ、もういいかな、と諦めかけている15歳です。

俺の元気を無視するかのように、俺の白髪は逆立っている。寝癖だ。

「ああゝむつかつくなあ」

ぼさぼさだ。長くはないのだが、短くもない俺の髪だ。

ちなみに言うと、俺はこの髪が大嫌いだ。白髪なんて普通の人間じゃなくね？と思ってしまふ。それに、このことで昔はいじめられていたからな。

「ま、とくに気にはしなかったけどな……。いじめの方は髪をとかしながら俺は呟く。

昔のことと言えば、まだ皆様に紹介してない奴がいるな……。

「って、皆様ってだれだ？俺は、ちよつと狂つてる人間か」

（皆様、きつとクラスの奴なんだろう）

そう思いながら、昔、といつても此処に来る前のまで一緒にいた人間のことを思い出していた。

榊原夏帆、俺が登校するたびに会っていた後輩。そいつの親友、俺の妹の如月由愛きづな髪は黄色がかっていて、少しくせ毛だった。

小さい頃はよくいじめられていてそこを助けたのが俺だった。

「お兄ちゃん、ありがとっ」

ただその一声がうれしくてたまらなかった。

今では、いじめよりも、男子からの告白の方が多いだろう。なに

せ、我が妹ながら可愛いからな。・・・俺もはたから見ればシスコンなんだろうな。

そんな妹だが、兄離れは一切しなかった。来る日も来る日も、「お兄ちゃん」だった。もう10歳超えているのに。

そんな由愛は俺しか知らない秘密が合った。それは、武器らしきものを持たせると、変貌することだ。まず、口調が変わる。そして瞳が放つ眼光に鋭さが追加する。これが我が妹なのか、と思えてしまふほど変わるのだ。

今は、どうしているか分かんないけど、元気にやってくれていることを願うばかりだ。

「・・・遅刻するな、これは」

時計を見て俺は「はあ」とため息をつき、学園に急いだ。

我ながら、すごいと思う。なにがって？簡単だ。此処にきてもう2週間ぐらい経ち新人戦まであと一週間というくらいまで来たのだが、完全にこの生活に慣れ始めている。

すごいって思いませんか？

今日も、また学校に行くと、鈴に罵倒され、瀬名に慰められる、そんなことだろう。けど悪くない、そう思っている自分がいる。

自然に、足が速くなっていく。

（俺、案外この生活好きなのかもな・・・）

けど、俺は忘れていた。此処が魔学だということ。此処は危険なのだ。そう、柴の時みたいに――。

――ザッ

こんな感じで俺の目の前に、黒いコートで身を包んだ人間が立ちはだかった。

「・・・キミが、如月くんか」

声からして男だろう。

「あんたは、誰、ですか？」

「『壊れた時計』 そう言えば、君にも分かるかな？」

「・・・！？まさかこいつ——。」

思考が途中で遮られた、と同時に、俺はいつの間にか、さっき居た場所から数メートル離れた場所に叩きつけられていた。

「・・・！？」

状況が判断できない。

吹っ飛ばされた瞬間でさえ分からなかった。

男は、俺に近づいてきて、そして——

——パチンツ

指を鳴らした、いわゆる指パチンツてやつだが、まただ、また俺はいつの間にか、胸元に刃が刺さっていて、そして吐いた覚えのない血が口から出ていた。

意識が遠くなる。徐々に暗くなり、また寒くなっていく。この感覚は柴の時と同じだ。また志士先生が助けに来てくれるだろうか。くそ・・・鈴の笑顔見たかったな。

この思想を最後に俺は、意識を失った。

男は、倒れている一茶の前に静かに立っている。ある人物がくるのを待っているのだ。

そして、男は口を開いた。

「やっと来たか。殺すのを手間取っているようだったから、私がやってしまったぞ——」

そこに来たのは一人の少女だった。

「——鈴」

それは、すらっと伸びた黒色のきれいな髪をした、遠峯鈴、そのものだった——。

戸惑い

ピッピッピッ

規則的な電子音が流れる。

（なんだか、胸辺りが痛い。何なんだろうか）

・・・そうか、俺刺されたんだった。でも、生きてる、のか？

一茶は、普通じゃ考えられない浮遊感を味わっていた。

目をそつと開ける。

（此処は、どこだ？）

目の前には、水の中で目を開けているように景色が歪んでいた。声を上げようと思ってもあげれない。此処でようやく分かった。

（これは、夢・・・か）

奥に居る人が何かを話している。どうやら、向こうは水の中ではないみたいだ。

聞く耳を立てると少しだけ聞こえた。

「功です。——が、なぜか——です」

「——か。問——はそこだな」

「・・・本当に——ですか？我が——まで」

「もう——たことだ」

（なにも聞こえやしねえ。けど・・・）

一茶にはこの夢が何やらすぐく現実的に見えて、昔こんなことが合ったんじゃないか？とまで思わせていた。

そこで、夢が途切れる。

目の前が、眩しくなる。

（——ッ）

そして、目が覚めた時には、病院の天井が目には広がっていた。

「——ッ」

頭が痛い。

「頭いってえ。刺されたのって、腹じゃなかったっけ」

試しに、刺されたと思われる場所に手を這わせる。

ズキンッ――

「~~~~ッ。いったいわ。こっちの方が・・・」

でも、何やら寝ている時なにか夢見てみたいだったけど。

いつの間にか汗でべたべただった身体を見る。

「・・・まあ、忘れるくらい重要じゃなかったんだろっな」

そう呟いて、時間を見る。

「今の時間は~~~~と」

18:35

ふむ・・・。

俺、もしかして、いやもしかしてじゃなくても、かなり寝てたッ

!?

朝に出て、こんな時間に・・・。

うん。と考えている一茶の病室のドアが開いた。

スタスタと歩いてくる音が聞こえる。この感じだと、一人じゃないな・・・。

ひょこつと姿を出したのは、瀬名と鈴、虎鉄だった。

「元気か？一茶」

と、虎鉄が問う。まあ、きつとこいつはこの2人と居たかっただけだろうからスルーを決行ッ！

「大丈夫？一茶くん」

涙目で聞いてくる瀬名。うん、いつもどおりだ。

「あ、あんたが、此処で棄権だと、試合出れないじゃないッ。いいッ!?これは、うん、心配じゃない、忠告よ、そう、忠告ッ!」

頬を赤く染めて声を荒げる。うん、鈴もいつもどおりだ。

「悪い悪い」と苦笑しながら鈴に言う。

「大丈夫。すこし、腹部が痛いけど・・・。試合には、出るからこういうと、三人は、驚いた顔をした。なぜ？」

「む、無理だよ一茶くん。結構重いつていつてたし、その傷」

え？じゃ、じゃア・・・鈴は――

「しょうがないでしょッ。いい？今のはうそッ。棄権しなさい」
鈴は、それでいいのか？

そう聞こうとしたが、それを俺の本能が許しはしなかった。

鈴が、目を赤くして水を溜めているのだ、いわゆる涙だが・・・。

「俺は、でるよ」

「・・・は？」と三人の声が仲良くハモる。虎鉄が、ハーモニ
ーをつぶしてるか・・・。

「言っただろ？鈴。俺は、お前のためなら何でもするって。お前、
出たいんだろ？」

「うッ」鈴は言葉に詰まる。

「俺の事は気にするな。俺は、お前のパートナーであり、お前の
友達だ。だから、俺を信じろッ」

少し強めに、そして真剣な目で鈴を見る。

「で、でも・・・」

「『でも』は禁止」

「け、けど・・・」

「『けど』も禁止。ってか、そういう問題じゃないでしょ！？」

「言わせなさいよっ。私にだって言いたいことあるんだからッ」

初めからそう言えいいのに。けど、こうシユンとしている鈴は
可愛かったな・・・。って俺は何を考えてるんだ。

「ふざけた内容だったら。承知しないからな？」

「あ、あなただって、今は厳しいの。無理してるでしょ？今だっ
て・・・。顔に出てるんだから」

鋭い――

確かに、実は今すぐくというほどではないが、腹部が、刺された
所が痛い。

「だから――」

「大丈夫だッ。お前の抱えてる痛みより、痛くねえよ」

少し、キザ過ぎたかも知れないな・・・。

沈黙の中数分経った。

「……。そこまであなたが、強情なんてね」

折れたのは、鈴だった。

「強情つてもの、悪くないだろ？」

「……。いいえ、最悪だわ。でも、ありがとう」

何やら、さつきよりも顔を真っ赤にして言う。

「あ、あア。いや気にするな。それより、お前熱でも——」

鈴の額に手を当てると鈴は——

「な、ななな、なにするのよっ!？」

パシッと手を払う。

なにか悪いことをしたのか？

「わ、悪い」

「いいなア……」

これまで黙っていた瀬名が口にする。

ん？瀬名も熱を測ってほしいのだろうか？

「チクシヨウ、なんで一茶ばかり」

虎鉄も呟く。

あア、こいつ居たっけ。今の今まで忘れてた、ごめん虎鉄。

心の中で虎鉄に謝った。

と、此处で、看護師さんが来て、面会の時間が終わったことを告げられた。

「じゃなア」と虎鉄。

「……」と、無視の俺。

「明日も、来るねッ」と瀬名。

「おうッ。ありがとうな瀬名」

そして最後に鈴。

「どうして、生きてるの……。それに、どうして試合にでるなんて言うのよ……」

小さな声だったため聞こえなかったが、結構長かった気がする。まア、明日にでも、聞いてみればいいか。

こうして、また静かな夜が来る。

ドアを、閉めた鈴は、複雑そうな顔だった。

（どうして……。だから、早くこの学園から出ていけって言ってるのに……）

「どうかしたの？鈴ちゃん」

瀬名が心配そうに聞いてくる。

そっか、此処には瀬名も居たっけ。

「大丈夫だよ。それよりい、アレのどこがいいわけ？瀬名わア」

真っ赤になる瀬名、相変わらずだなあ。

（大丈夫。私は、こうして偽りの自分を演じてきた。これからも、大丈夫）

「瀬名。ごめんね」

「ん？鈴ちゃん、なにか言った？？」と聞いてくる瀬名。

「なんでもないよ」と返す。

今は、まだ瀬名の友達だから。

鈴の首飾りは青く光っていた――

人間凶器（前書き）

久しぶりに更新っ！！！！
楽しんでください。

人間凶器

それから数日。俺と鈴はいつもと変わらない訓練をして、そして迎えた当日――

「マジで、やるのか・・・」

校内大会だと思って正直な話バカにしてたけど・・・。

俺はドーム状の建物の中にある平地にクラス代表として鈴と立っていた。

「毎年こんなものよ。こんなので驚いてたら、あなたこの先やっていけないわよ？」

おお、今になってプルプルしてきたぜ。これが武者震い――緊張して震えてるの？ 気持ち悪い・・・」

はい、そうです。すみません、俺今ごまかそうと・・・。

「じゃねえっ！！ なんだよ。気持ち悪いってっ！！」

「素直な感想よ？ 悪い？」

「何、その『普通でしょ』みたいな顔はっ！！」

首をかしげる鈴。

うーん、とわざとらしく唸ってから俺に言い放った。

「普通でしょ？」

もう、俺が悪かったですっ！！

俺は落胆するかのように身体が前のめりになりながら、中央まで向かった。

「えー、ごほんっ。では、今から本年度、初学年のクラス対抗マッチを行います」

いかにも『教頭』という感じの人が挨拶を告げると、その瞬間――

『わあああああつ!!!!!!』

地響きがするほどの歓声が響き渡った。

「うおっ!・・・こりゃ、すげえな・・・」

「だから言っただでしょ?一応言うけど、あたしはこの大会の優勝候補でもあるんだから、負けたらブーイングで軽い方よ?」

そんな重荷を乗せられても・・・。

「せいぜい、頑張んなさいよ。・・・来年まで名前が載るように・・・」

「・・・?」

何故だか、俺の目には鈴がとても悲しく映った。

一回戦は30分後・・・まだ、大丈夫。

あたしは、みんなが会場に夢中になっているとき、こっそりと席を外した。

だが、あたしは気付かなかった。この行動に気づいている者が居るということ。

歩いて数分。

場所は会場を離れて数メートル。そこに男は立っていた。

「鈴・・・遅かったな・・・」

「しょうがないでしょ・・・?」

この人は何も分かっていない。あたしの気持ちも、他人の気持ちも・・・。

分かっているのは自分の存在と任務と、そして『殺し』
まるで凶器だ・・・。

「・・・鈴」

びくつ、と身体が震える。

「な、なに?」

「お前はほんと・・・」

あたしは、目の前の男を見る。

何を言われようが、あたしには……。

「才能がない……。がっかりだ……」

「……っ」

あたしは、その男を睨みつける。

その言葉だけは、言われたくない。何も努力せずに力を手に入れた奴からは……。

「まだ朱雀の方が……マシだ」

「くっ！！！！貴様の汚らしい口で、兄さんの名前を呼ぶなっ！！！！」

「黙れっ！！！！鈴、お前の立場、分かっているのか？」

目元が熱くなる。そして景色がにじみ、一本のしずくが頬を伝う。悔しい……。あたしは馬鹿にされても、別にいい。でも、尊敬している兄さんをバカにされて、そして何も出来ないあたしが、悔しい。

「……その涙もろい所は彩子あやこにそっくりだ……」

「……」

彩子。あたしの亡き母。

そして、その思い出を語るこの男こそ、あたしの、実の父親なのだ……。

「出てこい。盗み聞きとは、魔法使いともあろう奴がござかしいぞ」
え……？

あたしは急に不安になった。

お願い、瀬名じゃありませんように……。

そしてあたしもう一人、思い浮かんだ。

一茶……。

「えー、ごほん。これは、連絡するべきでしょうか？」

すっ、と木陰から現れたのは、教頭だった。

「これは、これは。大いなるこの学校の教頭先生ではありませんか……」

「はい。教頭、ということで、あなたの胸に刻まれている『壊れた時計』の文字は見過ごせません」

にやりと不敵な笑みを浮かべる父。

だめっ！！やめてっ！！！！！！——

「逃げてっ！！教頭先生っ！！！！」

時はすでに遅かった。

スパン、とバターを切ったかのようにきれいに切れた上半身は、そのまま重力に負け崩れ落ちた。

「・・・どうして・・・」

あたしは片手に長剣を握った父に問う。

「どうして、関係のない人を・・・っ！！」

「のちに過ちの原因を成る。ならばその前に・・・刈るっ」

その目は鋭く、刃のような冷たい光をまとっていた——・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6906p/>

恋愛 魔法？

2011年4月5日00時13分発行